

妙  
境  
游

丁巳年夏月  
王羲之書

■この作品は（どう考えても）フィクションです。  
実際の人物・団体・事件とは一切関係無いと思います。

# A 次

	プロローグ	p. 2 ロドリゲス・サトコ・メリーミア・ABE 舞台 アルミサッシカビ
一万石	本能寺の変	p. 2 ロドリゲス・サトコ・メリーミア・ABE 舞台 アルミサッシカビ
第2章	ドブネヅミ	p. 4 ククレカレーJ.J.
第三構	バラジクロロベンゼン	p. 5 アルミサッシカビ
Section four	"Jack bited the dog!"	p. 6 ノスタルジーヴェハ
第五楽章	<small>サボテン</small> 獄王樹の断末魔	p. 8 ククレカレーJ.J.
第6段落	けるかも調の殺意	p. 9 アルミサッシカビ
Mission 7	たくぎん崩壊!!	p. 10 ノスタルジーヴェハ
L.V. 8	カマンペールフォカッチャ	p. 13 アルミサッシカビ
9合目	パーフェクトのほほん茶	p. 14 ククレカレーJ.J.
10時間目	「嗚呼…野麦峠」	p. 16 ノスタルジーヴェハ
イラスト	「一家団欒」	p. 17 ククレカレーJ.J.
第11代	ナポリタン大名	p. 19 アルミサッシカビ
エントリーナンバー12番	ばけつがき	p. 20 ノスタルジーヴェハ
13レーン	ドナドナ	p. 24 ククレカレーJ.J.
	エピローグ	p. 27 ククレカレーJ.J.
あとがき①	— 一人言エッセイ —	p. 28 ククレカレーJ.J.
マンガ	4コママンガ①	p. 31 ククレカレーJ.J.
マンガ	4コママンガ②	p. 32 ククレカレーJ.J.
イラスト	「怒ラエモン」	p. 35 ククレカレーJ.J.
イラスト	「ドラエモントノヴィ太」	p. 36 ククレカレーJ.J.
あとがき②	<small>とうきょうむげんかしゅう る り ふうりんすいめいたん</small> 東京夢幻歌集「瑞璃風鈴水鳴譚」	p. 37 アルミサッシカビ
イラスト	「風柳」	p. 44 サンドバッグ・奏
あとがき③	— 本当の後書き —	p. 45 アルミサッシカビ
あとがき④	実は、いきなり頼まれたんです。	p. 46 ノスタルジーヴェハ
イラスト	「天然危険物」	p. 47 アルミサッシカビ・ククレカレーJ.J.
イラスト	「カプチーノ伊藤」	p. 48 ククレカレーJ.J.
イラスト	「リトマス四劍士」	p. 49 サンドバッグ・奏
イラスト	「エクセル」	p. 50 Juuma with カバブ
イラスト	「ラブリクエスト蒲腐」 <small>Summer Version</small>	舞臺 Juuma with カバブ

## プロローグ

1998年10月18日、太陽はその日の役割を終え、月が出る為の舞台を用意していたが、雨雲という緞帳は決して上がることはなかった。空を支配している厚い膜は、大量の水を人間どもへと投げ付け、地上の音さえも支配していた。そんな雨の夜のことだ。

一人の男子高校生は、バイトを終えて家へ向かって歩いていた。ふと背後の茂みが揺れたような気がした。

「ン？」

男子高校生は後ろを振り向いた。だがそこには何もなく、ただ雨が降り続っていた。彼は雨のせいだと結論付け、再び、家に向かって歩き出した。数分歩いた後、彼は公園の入口に差し掛った。

「もう遅いし、ちょっと恐いけどここを突っ切っていくか。」

彼はそう言うと近道をする為に、人気のない公園の中へと入っていった。

『ガサッ！』

また、後ろの方で音がした。気のせいではなかったが、猫かなんかだと大して氣にもとめず歩き続けた。また音がした。彼はハッと振り返った。するとそこには、全身黒い服を着た男が立っていた。彼は思わず叫んだ。

「だ、誰だ！」

男は、その質問に、言葉で答えずに、動作で答えた。男は手にしていたモノで男子高校生の頭を強く殴った。男子高校生は、よろりと踉跄て、男に飛び掛かろうと試みたが、打たれ所が良くなかったらしく、ガクッと膝を折った。僅かに風でフードが捲れて、フードの中から少し顔がのぞいた。

「お、お前は!!」

それ以上、口から音は出て来なかった。いや、出せなかったのだ。男は血で染めた手を雨で洗いながら静寂の中へと消えていった。

## 一万石　本能寺の変

「W～、起きなさい。遅刻するよ。」

「起きてるよ～。今、そっち行くから。」

W. Kはスリッパを足に引っ掛け食卓へと歩いた。椅子に座り既についていたテレビをぼんやりと眺めていると、テレビからキャスターの声が聞こえてきた。

『昨夜未明、K県Y市O公園で男子高校生が何者かに殺害されました。被害者N. T君17歳は、近くの県立O高等学校の2年生で、アルバイトを終え、その帰り道で被害に遭ったものと思われます。全身を鈍器で数十回殴打されていて、発見された時には既に死亡しておりました。………続きまして次のニュースです……。』

「な、何だって!? T君が殺された!?!」

テレビを見ていたWは、思わず立ち上がった。

「どうしたの? W. いきなり立ち上がって。」

「同じクラスのT君が殺されたって!!」

「うそっ!! 本当なの？」

「うん、今ニュースでやってた。」

「そう…。でもとりあえず学校へ行きなさい。気を付けてね。」

「うん、じゃあ行ってくるよ！」

食事を終えたWは、いつも通りに家を出て行った。

学校は、予想以上に騒然としていた。取材陣の一人がW. Kに近付いてきた。

「ねえ、きみは何年生？N. T君のこと知ってる？」

「さあ？」

そう言うと、Wはさっさと教室へと入った。教室は、外とはうって変わってしんとしていた。そこには、いつものメンバーのT. K, Y. Y, Y. Aがいた。Y. Aが話し掛けてきた。

「おはようK君！今朝のニュース見た？」

「うん、さっき取材の人がいた。」

「僕は職員室の前を通ったら、F先生にマスコミに何を聞かれても答えちゃ駄目だって、釘刺されたよ。」

暫く会話をしていると、放送が入った。

『緊急朝会を開きますので、生徒は至急体育館に集合してください。』

朝会では、N. T君の死が告げられ、全員で一分間の黙祷を捧げた。その日、授業は午前中で終了し、高校としては異例の集団下校をした。しかし、その生徒の中で悪ふざけをして一人の男子高校生が姿を消した。その事に気付く者は無く、生徒達は皆、速やかに帰宅した。担任から自宅学習が命じられていたので、Y. Yも自室で勉強していた。下から母の呼ぶ声がする。

「Y～、あの事件の犯人捕まつたらしいわよ～。」

「えっ、うそっ。」

Y. Yは階段を駆け降りて來た。

「ほら、今ニュースでやっているわよ。」

二人はテレビに注目した。

『昨夜、Y市で男子高校生が殺害された事件につきまして、K県警は近くに住む教師J. T容疑者（4？歳）を強盗殺人の疑いで逮捕いたしました。現在T容疑者は事件について否定していますが、彼の自宅のアパートより、T君のものと思われる血液の付いたバットや、T君の財布なども見つかっていることから、犯行はほぼ間違いないものと思われます。では、中継の清和さん、現場からお願ひします。』

『プチッ』

Y. Yはテレビを消した。そして、こう呟いた。

「Tくん、犯人は捕まったよ。」

すると、五時を告げるチャイムが鳴った。それを聞いてY. Yは、この事件がまだ終わりではないような気がした。そう、これは、これから始まる血で血を洗う連續殺人の開幕のベルであった……。

## 第2章 ドブネヅミ

「昨日のニュース見た？犯人捕まったんだってね。」  
と、Y. Yは歓喜の声を上げながら教室に入って来た。……が、この日は休日で教室には誰もいなかった。

「ま…まさか、みんな殺されちゃったのか —— ！」  
Y. Yは涙を流して泣いた。それはリストラされて人生の終結を迎えたサラリーマンのようにも見えた。

「君はバカだな。今日は休日だぞ。」  
誰もいない教室から声がした。

「誰？ま…まさか……ウワ —— ！」  
とY. Yは叫んだ。そして、腰が抜けてしまった。それもそのはず、誰もいない教室、そしてどこからか聞こえる不気味な声ときたら、ある程度の展開と自分の立場はY. Yにも予想できていた。そして次の瞬間、なんと教卓が動いてY. Yに向かってきた。この予想だにしなかった展開にY. Yは気を失いそうになった。もう叫んで手足をバタつかせることしか出来なかつた（らしい）。

「だべボガビボヘヘヒイイイ！」  
それは、まるで宇宙人と交信している未来人間のようにも思えた。そんな自分にY. Yはウットリとつかっていた……なんてことは無かつた。まあ、それはさておき、絶叫とは関係なく楽しむように近付いてくる教卓に対し、もはやY. Yはおもらし攻撃（O作戦と呼称）しか残されていない状態であった。そしてO作戦決行を司令官（ワシントン）が下した瞬間にY. Aの野郎が出てきやがった。

「ワハハハハハ。ポルターガイストーみたいな —— 。」  
と、おしゃめな声でY. Aは言った……が、時すでに遅し、Y. YはO作戦を決行してしまっていた。もうY. Yは放心状態であった……。

———— 時は遅り5分後 —————

「なあABE（エイブ）君、もうイニシャルで呼ぶのはよそうや。」  
と、雄介はABEにおごらせた天プラソバを食べながら言った。

「つーか、もうやめてるじゃねーかー！」  
ABEはキレていた。それもそのはず、雄介をおどかした罪として、雄介から『ズボンの交換』（1998年）を要求され、その要求を三国同盟（by 航・テルアキ・雄介）により強行されたからであった。もはやABEは注目の的であった。

「しかし、僕らは気が合うなあ。休日に4人とも学校に来るなんて。」  
と、航は言った。

“つーか、ただマヌケなだけなんじゃあ！”  
と、雄介は密かに思った。

「あっ、そう言えば、犯人は違う人だったらしいよ!!」  
と、テルアキは湯気で眼鏡を曇らせながら言った。

「ウソッ！」  
三人は口を揃えて言った。

「うん。どうやらあのバットに付着していたという血液は容疑者本人のものだっていう話だ。彼は自分で自分を痛め付けるのが好きだったみたいでさ、たまたま伸夫くんの近くの家だったから怪しまれたんだろうね。」

と、すごいわかりやすい解説をするテルアキに対して、もはや三人は崩になっていた（ら

しい)。

テルアキは続けた。

「それで、これは新情報なんだけど、どうやら伸夫君は長い髪のカツラと、2-7で豚の角煮を作っている男達の写真を持って倒れてたらしいんだ。これがおそらくダイイングメッセージってやつだ。」

と、専門用語を交えて話すテルアキに、三人はもう“一途な想い”さえも抱いてしまっていた。そして暫くの時間ウットリ状態だった三人から一番最初にABEが抜け出した。そして言った。

「長い髪…ロング…角煮を煮合う男達…似合う男……そうか！犯人はオレだ！ロングが似合う男で2-7と言ったらオレしかいない！そうだ、オレが犯人だ——！……………あれ？」

ABEは我にかえった。そして周りに誰もいないことに気が付いた。そう、ABEはダイイングメッセージに本当にピッタシ(?)あう男だったからである。(それに気が付いた皆さんのが逃げたってワケだ！)

「SHIMATTAA^A^A^A！コノママジャ俺蛾犯人煮ナッテSHIMAU U^U^U！」

と、もはや錯乱状態のABEは誤解を解く為にホームに向かって走った。それはもう200%の力で走った。光速を越えてタイムスリップしちゃいそうな勢いが仇(あだ)になった。ABEは三人を見つけて止まろうとしたが、その速さゆえ、止まれなかったのだ！

「ウゴ——！」

ABEは叫ぶ、だが、止まりはしない。そして、その矛先は雄介に向けられた。

ドゴッ!!

と、鈍い音とともに雄介はABEに押され線路に転落した。約0.5秒後、電車は雄介の上を通過した。もはや雄介の命はなかった。

1998年10月15日 午前10時37分  
雄介(16) 死亡

「あーあ、死んじゃった。」

これが雄介の最後に遺した言葉だった。(誰が聞き取ったかは不明)

### 第三構 パラジクロロベンゼン

「!」「!!」「?」「??」を始めとする数々の感嘆文があたりを飛び交った。ABE(以下熊蔵)は言うまでもなく、他のみじめにも残された二人ぽっかりしもびびりまくった。それはもう、真北から24.6℃傾いたくらいの勢いであった。そして熊蔵は、

「まだ復元可能だ！人間の自然治癒能力さえあれば！」

という、日本国憲法第9条に載っていそうな言葉を発したが、そこらじゅうにいるどんな生命体にも、

『それは無理でがんす。』

とわかった。その次の瞬間、残された2人は、汗と涙と鼻水と鼻血と胃液と唾液と胆汁を混ぜ合わせ、弱火でコトコト（オノマトペ）煮た後で、顔に塗りたくったような様子で逃げ出した。熊藏の心理グラフは、焦燥・絶望・狂悖・発狂の順にデータを感知し、パーフェクトのほほん茶<sup>\*1</sup>的なパワーを發揮していったらしい。熊藏は、誰かの予想通りの反応を避ける為、“意表”を突くことを考え、行動に移した。そして、熊藏は通過しようとする快速特急の前へ飛び込んだのだ。

……だが！熊藏は生きていた！よく見るとその下にマッハ0.001のスピードで逃げたはずの航の死体が転がっていた。さらにその下に『侍り』という謎のダイイングメッセージが残されていた。それはまさしく謙譲語であった。

と、その時“閨士”<sup>\*2</sup>は猪<sup>\*3</sup>を刺<sup>さす</sup>叉<sup>さす</sup>で突いた。

午前10時40分 航[16]死亡  
死因………圧死

#### Section four “Jack bited the dog!”

「何故?????! 熊藏（以下ABE）は生き延びられたんだ!?!」  
と、ABEとテルアキは声を揃えて叫んだ。

「おい！何でやねん（アクセントは歎<sup>あ</sup>付<sup>け</sup>る<sup>だ</sup>!!）！君は叫ばなくてもいいでしょ？」

「それもそうだな…何をやってんだ？オレ…。」

「……………。」

刹那であったが、二人の間に沈黙が走った。テルアキは2秒後にその沈黙を突き破った。

「こ、これは殺人事件だぞ!!だって、時速1.2km（=マッハ0.001）程の速さで

逃げたはずの航君が被害に遭っているんだからね。」

「確かにそうだな…」

「警察へ連絡をしよう!!」

「え？う？あっ？そ、そうだな…。」

テルアキはABEの謎の発言部分を若干気にしながらも、110番通報をした。そして、37秒後に、けたたましいサイレンの音と共に警察官がパトカーに乗ってやって來た。2人は現場検証を警察官の制止を振り切って自分達なりに勝手に行なった。その後、2人は警察官に怒られたが、平然とした顔で事情聴取の為に近くの警察署へ徒歩で向かった。

署の取り調べ室の付近は何とも言えない厳肅な雰囲気が漂っていた。暫く待っていると扉が開き、最初にテルアキが取り調べを受けた。

「あー、何でこんな事が起こったんだ？厄介な事しやがって…」

ABEがこんな事を考えている内に7分が経ち、テルアキが部屋から出て來た。次はABEが事情聴取を受ける番だ。テルアキはABEに待っていてくれと頼まれていたので、部屋の外で待っていた。ABEが事情聴取を受けている部屋からは物凄い音が何度も何度も聞こえ、しまいには出前寿司の配達人が取り調べ室に入る所までもテルアキは見てしまったので、一体中では何が起きていたのかを考えてしまった。

\*1 「のほほん茶」…サントリーが2000年頃まで発売していたブレンド茶。一部のメンバー間でブームとなった。

\*2 「閨士」…魯迅の代表作「故郷」の登場人物。主人公が幼少時代に仲良く遊んでいた。

\*3 「猪」…同じく「故郷」に登場する動物。穴熊のような動物らしい。

30分後、ABEがフラフラとしながら部屋から出て来た。しかし、顔は何故か妙にニコニコしていた。

「フゥー、何で俺だけこんなに長いんだ？ゲブッ。まあ、この謎は必ず解いてみせる!! ちっちゃんの名にかけづに！」

「は？」

テルアキはABEの言葉の意味がよく分からなかった。

時は午後——惨事が起こったとは思えない程穏やかに空は晴れていた。2人は、O駅の近くのベンチに腰掛けていた。取り調べが済んでからずっとこのベンチに腰掛けていたのだ。近くを通る一般の人々は何故かABEばかりをジロジロと見ていた。

「ねえABE君、謎を解きたいんなら、今までの経緯をもう一度よく考え直して見ようよ。」

「ああ。」

テルアキは話を始めた。

「はじめに、伸夫君の事件の時は、ロンゲのカツラと2-7（35期生）で豚の角煮を作っている男の写真が残されていて、雄介君の事件ではABE君に押されたのが原因なんだよね…………いーっ？ABE君が押した？」

今更、テルアキは事の重大さにピックラこいた。そこでABEは反論した。

「いや、違うんだな？これが？確かに俺はタイムスリップ寸前の勢いでは走ったが、イヒョウをつくシリーズパートⅠとして、雄介君を押す振りをしただけだぞ。止めなどさしてはいない!!でも、意表をつくのはいとをかし…」

「ほーっ…そうか…。でも最後にABE君が言った事はどういう意味？」

「だーかーらー!!意表をつく事が面白いって言いたいだけだって。本当に俺は犯人じゃないからな!!」

「ふうーん……」

テルアキは半信半疑な様子で話を続けた。

「もしABE君の言った事が本当ならば、誰もしくは何が雄介君をホームから突き落としたのかが問題になるよね。」

「Yes, that's right! Good-bye.」

「おい、帰るな!!」

ABEの不審な行動をやや気にしながらも、テルアキはABEを引き止め、話を続けた。

「次に航君の事件だけれど、航君も何者かに突き飛ばされ、『待り』と言う意味不明の謙譲語を残していたんだよね。これはダイイングメッセージかな？」

「さーな、航君は待りに夢中だったからな。どうだかな？」

「やっぱり、どうだか分からぬよね…。あ！ そう言えばさ、雄介君と航君に使われた凶器（？）は電車だったよね。」

「ああ、そうだけど、それがどうした？」

「今更気付くのも何だけどさ、普通は人身事故が起こったならば電車は緊急停止をするはずだよね。…でも、あの電車はノンストップで通過して行った…。」

「そう言えばそうだな。」

2人はそれ以上の事はこの日には思いつかなかった。そして、テルアキは痺れを切らして言った。

「何だかんだ考へても、今はもうこれ以上考へられそうもないよ。腹も減ってきたし、もうこんな時間だよ。帰ろうよ。」

既に駅の時計は3時10分前を指していた。ABEは学校帰りの中学生や塾通いの小学生らにジロジロと相変わらず見られていた（已然形+ば）、イライラしながら言った。

「そうするか。」

2人は帰った。

翌日——何も知らぬその他の生徒は普段と変わらぬ様子で登校していた。学校では、再び緊急朝会が開かれた。生徒はザワザワとしていたので、朝会が開かれるまでに、いつもと同じく、15分程かかってしまった。先生軍団の内、約60%の先生は無表情で、10%の先生は泣いていて、残りの30%の先生はキレていた。強行的に会を始める事にした校長は自分の頭を撫<sup>な</sup>でながら、いきなり壇上に上がって大声で話し始めた。

「えー、お早よう御座います。中には知っている人もいると思いますが、昨日、再び悲惨な出来事が起きました。2年7組の雄介君と、航君が何者かに駅のホームで突き飛ばされて通過する快速特急にはねられ、尊い命を奪われたのです……（中略）… …ですから皆さん、彼等の御冥福を祈って黙祷<sup>かれら もくとう</sup>を捧げましょう。以上!!」

校長の話の後、一分三十秒間、黙祷をした。しかし、約半数の生徒は笑いを堪えていた。その日は、VIP並の警備付き（しかもマスコミのおまけ付き）で、生徒は再び集団下校を行った。生徒の中には学校が授業全カットで下校となつたので、「何の為に学校に来たんだよー」と愚痴<sup>ぐち</sup>る者もいたが、気にする者もなかつた。

時は流れ、午後——相変わらずよく晴れた昼下がりであった（ドナドナ的要素）。

テルアキは走りながらABEの家へとやって來た。（家をどうやって知ったかは不明）

「ABE君、新ジョーホーだよ!!あの伸夫君が持っていたロングのカツラは、実はテレビ局の物だったんだ!!」

「何で、テレビ局のカツラを伸夫くんが持っていたんだい？」

「それはね、某Nテレビのコスプレ好きアナウンサーが人気のあのT・Kの格好をして、調子に乗ってドラマ撮影の実況中継をしていたら、誤って落としたんだって。」

「そんな馬鹿なー。」

ABEは絶句だった。

## 第五楽章 サボテン 霸王樹の断末魔

### 〈天国〉

「そいえば今は1998年10月なんだよね~。」  
と、寝ころがりながら雄介が言った。どうやら彼は『笑っていいとも』の後で『ごきげんよう』を見てしまった結果、テレビから離れられなくなってしまったらしい。

「そうそう、ABEの思惑が見事に破られたわけだね。」

と、同じくテレビの虜<sup>とりこ</sup>になっていた航が言った。

### 〈地上〉

「あわわわわ——！やめろ——ABE！はやまるな——！」  
テルアキは叫んだ。それもそのはず、ABEがナイフを左手に、日本刀を右手を持ってテ

ルアキに近づいてきたからだ。

「どうも君の情報は危な過ぎる。まさか俺の副業がNテレビのコスプレ好きアナウンサーだったって事まで知っているとはな。」

ABEは息も途切れ途切れに言った。どうやら本当に切羽詰まっているらしい。

「ハーハ、フウウウフウウウ、ヘエエヘエエ、ヒィーヒィー……」

もう本当に殺る気だ！  
↑

「ホホホホホ ——！」

ついに狂った。ABEは超速ギヤーを装備したミニ四駆のようにテルアキに飛び掛かった。

## ズブッ!!

ABEのナイフと日本刀と仕込み刀がもうメタクソにブッささった。もうテルアキの命はなくなったとABEは確信した。……が、それは同級生の孝允君であった。そう、間一髪、テルアキは逃げたのだ。

ABEはテルアキを追った。しかし超速ギヤーの選択がたたった。超速ギヤーは最高速がとっても魅力なギヤーセットな理由で、加速力が無く、おまけにコーナーでよくふつぶのだ！

「くそっ、ピットインだ。やっぱりギヤーのレベルをおとした方がいいのか？それとも……そうだ！ペアリングローラーを装備するんだ。それも直径19mmのアルミの軽量なやつ。これでスピードを落とさずに綺麗なコーナーリングができるはずだ！」

と、ABEが考てる内にテルアキはひたすら逃げた。がんばれテルアキ、

## 生きろ!! (もののけ姫より)

### 第6段落 けるかも調の殺意

〈天界〉

「ドブンと入って 起き上がって、耳っこパッタパッタ、おぼっこチューチュー……」  
こんな感じで航・雄介と新入りの孝允は、三途の河を渡らんとしておった。

〈地上界〉

「まだ血が足りぬ～。」

ABEは知らぬ間に自分も想像しえない言葉を撃ち放った。実はABEは二重人格であったのだ。多分二重人格であろう。きっと二重人格だ。いや、二重人格であるはずがない。でも二重人格かもしれない。本当の所はよく分からぬのだが、ABEはささやかな言い逃れをしていたのであった。

6分後弱でABEはテルアキに追いつき、背中をポンと軽く、そう本当に柔らかく触れようとしたのだ。が、しかし、テルアキの背中には、伝説の日本刀“虎徹”がブッ刺さっていた。もうテルアキはクビヨベバ<sup>\*1</sup>になり果て、最後のふんぱりを見せていた。

やはりヤンおばさん<sup>\*2</sup>の正体は小崎先生<sup>\*3</sup>だったのだ。

江頭2時50分 テルアキ[16] 死亡  
死因………脳内出血

\*1 「クビヨベバ」…もうフニャフニヤでどうしようもない状態を指す造語。語源はナイショ。

\*2 「ヤンおばさん」…「故郷」の登場人物。かつて「豆腐屋小町」と呼ばれていたが、今はコンバスの様。

\*3 「小崎先生」…筆者の母校の英語科教諭。別名マッハ小崎。何となくヤンおばさんに雰囲気が似ている。

## Mission 7 たくぎん崩壊!!

「あう!? あ~ みのゆでちゃまご~」

と言うような感じで、ABEは訳の分からぬ事を九官鳥の如くホザきまくり、その次は、

「ウッヒョヒョヒョヒョー」と雄叫びをあげながら時空波が乱れる程の速度で走り去って行った。

翌日 —

警察と警察機動隊、そして警察予備隊が783人体制で、軍歌を流しながら潔くザクザクと歩いて来た。物凄い重圧感が周りに溢れ出し、そのせいで近所のチビッコ達は尻尾を巻いて逃げてしまった。誰が見たかは謎だが、その機動隊の中には宏児（『故郷』より）がいたらしい。本当かどうかは甚だしく疑わしい限りである。そして、ビル=ゲイツ（コンピューターソフト開発マニア）がサーモグラフィを用いてABE宅を調べた結果、ABEがその中にいる事が判ったので、ABE宅に向かって197dB（デシベル）の硝子も30×π枚程たやすく粉碎されてしまうという専ら噂の超スーパー大音響でABEに説得を始めた。

「お前は!!お前は!!お前!…お前…お前は…」

山彦s（山彦の複数形）の登場だあーい!!が、この瞬間、近所の半径25.82kmの家々の窓硝子が粉となり侍り。そしてその時、青森県の奥入瀬から、庭園の飾りにひびが入ったと言う苦情の電話が警視庁の方にかかる來た（らしい）。と、同時に象は月を見ながら悲しい顔をして祈っていた。〔『オツベルと象』（宮沢賢治）より〕

「B O S S、是非とも音量を下げませう。」

と、説得者の傍らにいた怪しげな言葉遣いの部下が言った。

「よし、わかった。……音響係に命ず!!ボリュームをとにかく下げる!!!」

隊長である説得者の命令で、ボリュームは120dB（それでも飛行機の真下のうるささ）に下げられた。そして、改めて説得が始まった。

「では、気を取り直して……うおっはん!!…お前は不完全に包囲されている!!さっさと

ロージョー（籠城）をstop~ingして出て来なさい!!まったく……宮崎駿withスタヂオヂ  
ヴリの愛のmassage(message)をコケにしあって!!!けしからんぞよ!!やっぱり、トトロ

はいいよなあ…大・中・小と3種揃ってないと駄目だぞ……うーん……（後略）」

完全に自分の世界にどっぷりと漬かってしまった妙な言葉遣いの説得者は、ABEの反論で目が覚めた。

「俺は、そんな殺人はしとらんぞ!!……ウイッヒッヒッヒ……証拠は存在するのかな?  
……本当にやってないってば!!……ウッヒョヒョヒョヒョ……次は誰にしようかな??  
イヒヒヒヒヒヒ…………????????」

この時、ABEが二重人格であるという事実が今のABEの台詞によって明らかになったのである。勿論、ABE宅の周辺の人々の殆どがその事に気付いた。が、中にはABEを“単なる口調が変わっているだけの人”だとしか思えず、周りの環境に付いていけなくなってしまって、オロオロとしている機動隊員もごく僅かだがいた。と、そこで再び説得者は笑みを浮かべて反論をした。

「ったく…2重人格め…もうごまかせないぞ!!鑑識の結果からもしっかりと出ているんだぞ!!あの虎徹にはお前の指紋がベトベトと付着していたんだ!!」

「うっ……。すっかり推理小説と忍たま乱太郎の読みたさで指紋を拭き取るのを忘れてしまった。ふつ、今回は京急開業100周年<sup>\*1</sup>だ。特別に罪を認めてやろう。」

「そうか、参ったか!!始めから素直に罪を認めればいいものを……でも…何が特別だ!!ふじやけりゅな!!」

かなり興奮気味であった説得者に、ABEが声を掛けた。

「まあまあ隊長さん、落ち着きなされ……ふつふつフッフッ……もうこうなったら仕方が無いな。ハッハッハッ……機動隊は皆殺しじょあい!!見ちょれえ…へんし〜ん!!」ABEはどういう訳か変身を始めた。そして、体中が徐々に金色に光り始めて来たのだ。だが、この時点では、ABEが何に変身したのかは平賀源内の協力がまだなかった為、全く分からなかった。

——ヴッピャピャピャーッ!!! (変身中のオーラの音・初期)

「をい!!部下!!」

隊長は額に汗を浮かべながら部下を呼んだ。

「はっ!!何でどうか、隊長!!」

「例のヤツを出せ!!いつも緊急時に備え、用意してあるヤツだぞ!!」

部下は慌てながらスーパーの袋に入った何かを持って来た。袋には『おむすび下さい』と、書かれていた。

「ハアハア…はい、どうぞ!!!」

隊長は袋の中身を見た途端、ゆで蛸の如く怒り出した。<sup>だこ</sup>

「こ、これは全然違うぢやないか!!お前、あいつとこれで戦えるか?このボケナスッ!!(ナス大好きクリスピーリー♪)」

その直後に隊長は部下に、始めチョロチョロ(いーと一マキマキ+ジャブ3連発) 中バッパ(備品の戦車の中に閉じ込める) 赤子泣いても蓋取るな(部下が叫んでも決して戦車を開けさせない) の究極飯炊き技をおしおきとして30秒の間に咬ました。

「ご…(グスッ) 御免なさい。あのデカイ奴のことですよね。(あー、あんなボケするんじゃなかった…)

「そうだよ!!あのデカイ奴のことだよ!!おい!!残り時間があと1分21秒345しかないぞ!!早く用意をするんだ!!」(オーラを発するタイプの変身は時間がかかる)

どうやって隊長がABEの変身の残り時間を道具も使わずに知ることが出来たのかは謎であるが、そんな事を考えている内に部下が何やらバズーカ砲のような変わった物件(増田流<sup>\*2</sup>)を持って来た。

「ハアハア…た、隊長!!持ってきました!!」

「おーう、これだよ、こ・れ!!」

そのバズーカ砲もどきの正体は、銃マニア振りが高じてしまった隊長がアメリカの裏業者(?)に~~囲~~で作らせた1000mm口径の拳銃、そう、あくまでも拳銃であったのだ。(隊長曰く、特注トカレフ)

——ヴィヴィーン…ドンドンドン…イートマキマキ… (変身中のオーラの音・終盤)

いつの間にか、ABEの変身は完了しそうになっていた。よって、隊長焦る!

「そ・そう言えば残り時間があとわずかだった!よし、すぐに発射だ!!」

隊長はその化け物トカレフ(勿論弾丸もデカイ)を変身終了間近なABEに向けて発射した!!

ズゴゴゴゴーン!!

\*1 「100周年」…京急電鉄の創立は1898年。執筆時は、ちょうど創立100年を迎えた年であった。

\*2 「増田流」…筆者の母校の国語科教諭。授業で頻繁に「物件」という言葉を用いる。

ABEは倒れた――

「では、この問題をやって見ましょう。やってくれる人、誰かいませんか?……うーん、希望者なしつ、という事で一、じゃ一余裕のある人に――……ああ、お休み中のABE君、すみませんが、やって見て下さい。」

ABEは英語の授業で指名され、目が覚めた。

(ん? ハルキゲニア??いやいや、H先生か…あ、という事は俺が見ていたのは一体何だったんだ? 確か、俺が連続殺人を起こし、しまいには変なバズーカ砲みたいな物で撃たれたんだったよなー。夢だったのか、全て……)

ABEは今までの事を全て80倍速ほどの「超」高速夢で見ていたらしい。

「ABE君ー、どうしたんですかー?」

「あ、はい、ええっと……Jack bited the dog!!」

「その通りっ!!」

その時、授業終了のチャイムが鳴った。

「はーい、今日はここまでです。次、128課の予習をお願いします。」

授業は終わった。だが、この鐘がこれから何かが始まるという事を暗示していたとは誰も知る由はなかった。

「おーい、ABE君ー!!何熟睡してるんだよ!!」

そこにはいつもの集団がいた。YUSUKE, WATARU, TERUAKIの3人である。その時、

「うおーっ!!俺が悪かった!!許してくれー!!」

「は?」

3人は揃って言った。

「ABE君、まだ睡眠が足りないのかい?」

「へ?」

ABEは混乱している……混乱状態が完治した!!

「ややややや、妙な連続殺人事件が起こって、俺がみんなを殺してしまう夢を超高速で見ていたんだ。詳しく言うと…んーとねー… (後略)。」

「ふむふむ、とにかく何だか物凄い夢を見ていたんだねー。いやいや、夢は夢なんだし、そんな事気にする必要なんてないと思うよ。」

TERUAKIはそんなに重大に事を考えていなかった。YUSUKE, WATARUも同様であった。

が!!! “イビヨウラツク” ような出来事が本当に起こってしまったのである。

それは、<sup>ほとんど</sup>生徒が帰ってしまった後である夜9時のことであった。ある男はバイトの為、帰宅が遅くなり、人気のない公園を歩いていた。その時!!彼は何者かに鈍器で殴られたのであった。

その翌朝、ABEは半分寝ぼけながらTVのスイッチを入れた。テレビから声が聞こえる。

『お早よう御座います。7時30分20秒を回りました。お昼のニュースの時間です。まずは横浜にズームイソ!!』

「なんだ…4チャンのズームイソ!朝か…。ん?」

ABEは耳をテレビに集中して傾けた。

『えー、昨晚の9時頃、S高校の男子生徒・水生君(17歳) [←『故郷』より] が、Y市のO公園で何者かに数回にわたって殴打され、死亡しました。警察では殺人事件と

して捜査を…』

ブチッ!!

ABEはTVのスイッチではなくTV本体を切ってしまった。電話線も切った……?

「夢と同じ事が…」

学校において、話題となる事は、当然事件についてであった。最初にYUSUKEがABEに話しかけて来た。

「ABE君、<sup>けさ</sup>今朝のニュース見た?」

「ああ……。」

「夢と同じような事が起こっちゃったよ!!どうする?」

「うーん…どうすると言われてもなあ…。あっ!!でも、俺は事件には関わってはいない

ぞっ!!被害者こそ違うが、犯行の手口は全く変わらない……どうすりやいいんだ<sup>\*1</sup>!!」  
その直後、ABEは廊下をマッハ0.07の高速で走り始め、図書室をぶちぬき、3棟3階の音楽室のピアノの所に激突してしまった!!

「ねえ、WATARU君、YUSUKE君、どう思う? ABE君の事。」

「さあー、よくわからんちゃん、おれっちちと頭悪いけん!」(九州弁)

「どうだろうねえー、夢が現実になっちゃったのかなー?」

WATARUとYUSUKE、そしてTERUAKIも、何が何だか全く分からなかった。  
その時、ABEは音楽室のピアノの所でふんばりながら漫才拳を行っていた。

## LV. 8 カマンペールフォカッチャ

翌日、世界に衝撃が走った。現実世界の他にもう一つ、夢の世界が存在することが科学的に証明されたのだ!そして、夢の世界から一人の男が現実世界へと現れた。その名も勇者ABE(以下A)。夢の世界では友人5人を殺害した伝説の勇者らしい。まもなくして、現実世界に住む全く同じ姿・形の少年が発見された。ABE(以下B)という少年だ。まだ殺人経験はなく、漫才拳という謎の格闘技を習得しているらしい。しかし、漫才拳は二人で使う拳法である。どうやって修業したかは厳密に言うと秘密なのだ。まあ、その後、なんだかんだあって、AとBは協力することが国際的に決定した。

——一ヶ月後——

ついに、奥義が完成した!ABE達は見事に漫才拳を完成させたのだ。ABE達に負けは許されなかった。奥義、その名も『ボウフラダンス』!!ボウフラダンスとは、ボウフラの如く踊り狂い、相手に次の動きを予測させない動詞の連用形活用語尾的な技である。

カムチャッカの若者がキリンの夢を見ている時、エクアドルの少年は、赤道を指でなぞっていた。

象がオツベルを見ながら

「なかなかいいね。」

と言っている時、クラムポンは、

「……………(沈黙)」

と叫んでいた。

約2,035,123,444秒後、予言通り、侍り星人と仲間達が現れた。黒幕は、侍り星人だったのだ!!

\*1 「∞」…フェルマータ。音楽の演奏記号で、本来の長さよりも「程よく伸ばす」ことを意味する。

## 9合目 パーフェクトのほほん茶

A（以下つきのわぐま）とB（以下ひぐま）は共に協力しあい、ついに究極の技『石破ラブラブ天驚拳』を完成させた。

「こいつはスゲー！これで世界はオレのもの。」  
なんてひぐまは思った。



だが、そう思ったのもつかの間、つきのわぐまが死んだ。

「なにい～！こいつはやばい。」

ひぐまは思った。そもそものはず、ラブラブ拳は二人の愛の力があってこそはじめて発動するわけであって、ダメージをくらってゲージを蓄めて、満タンになったらリミッター解除で『超級武神歯山』なんてナンパなものではないのだ。そう、二人の愛あってこそなのだ！これはすばらしい。24時間テレビに出演してほしいほどだ。

「くそー！また他の奴を捜さなくちゃいかんのか。まあ、代わりなんていいくらでもいるか。」

ひぐまは、つきのわぐまに、ツバをはきかけていった。その時、死んだはずのつきのわぐまの体が動いた。

「なにいー！ポッ、ポルターガイストオオオオ！」

ひぐまは叫んでみた。別に特に何も驚いてはいなかったのだが、リアクションをしないと彼に失礼だと思ったからであった。

「オレとの愛は二セモノだったのか……。」

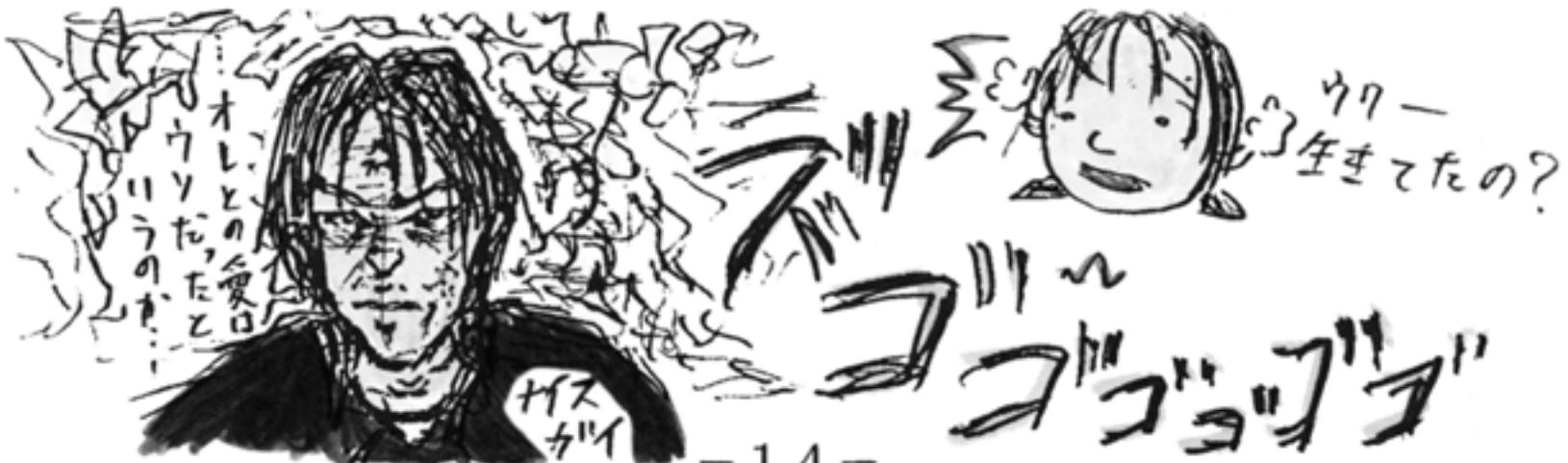
その暗く低い声が地の底から響いてくるようであった。

「たぶんね。」

ひぐまは、そっけなく言った。

「た…たぶん～～？だとおおおお！あ、曖昧な考え方しやがって～～！白黒はっきりして下さい！」

彼はキレた。もうぶち切れ状態で最後に敬語を付けてしまった程だった。そして、その憎しみのエネルギー（肉エネルギー）によって、彼は脱皮した。そう、彼は死んだのではなく脱皮準備中だったのだ！しかも脱皮したつきのわぐま（以下わぐま）はナイスガイだった。



「くらいやがれ！オレの怒りのゴッドフィンガ — !!!!」

叫ぶやいなや、わぐまは右手を**あや**妖しく光らせてひぐまに向かって來た。もうこれはどうあがいても逃げられないと思われた、ひぐまが。【自発+倒置】

「くそっ！こうなるからホモは嫌なんだ。」

なーんて愚痴ってる間にひぐまはわぐまに張り手をされた。それはもう張り手なんて甘いもんじゃなく、手刀だった。（…ということは最初から張り手じゃなかったってことか？）わぐまの手刀は一発でひぐまの内蔵をえぐり出し、挙げ句の果てに3枚におろしてしまった！そしてあとはちょっとお腹のあたりを流水で洗って、上等な日高昆布でしめてあければ明日には美味しいひぐまの昆布しめが食べられるぞ。なーんて、

だー！

と涎が垂れてしまったところを女子高生に見られてしまって、

「サイッテーって感じ～～。」

みたいなことを待られて、

「うつおー！」

なんてやっちまった——！なんて泣きたくなって、ついでに、

「私はインフルエンザなんですか？」

なんてカルロズ<sup>\*1</sup>ぱりの英語をしゃべったら医者が出てきて、

「いいえ、ただの風邪ですよ。」

とか無常観たっぷりに診察されて、

「お前は何でそんなに無機的にしゃべりやがるんだー！」

って疎外感と怒りが込み上げてきて、うんぬんかんぬんetc.などなど……＊

……とまあとりあえず（古語で「かつ」）ひぐまは死んだな、とわぐまは思ったのである。そして周りで見ているチビッコのみんなやレディーの皆さんを意識しつつ、決めポーズをとっていて、機会を見計らって、

「僕と握手！」

なーんて言ってやろうかなあと思っていた矢先、わぐまは手に乗っているものが妙に軽いのを感じた。不審に思って見てみると……魚！ しかも刺身！（おまけにゆーと鯛の尾頭付き）が出来上がっていたのだ！



「ひ…ひぐまー！なんと変わり果てたことよ【詠嘆】！」  
わぐまは“やりすぎた”と思った。

\*1 「カルロス」…英語(オーラルコミュニケーション)の教科書の登場人物。

10時間目 「嗚呼…野麦峠」

「本当にひぐまはこのままやられてしまったのか……。いや、このままでは話がストレートすぎて三流だ。」

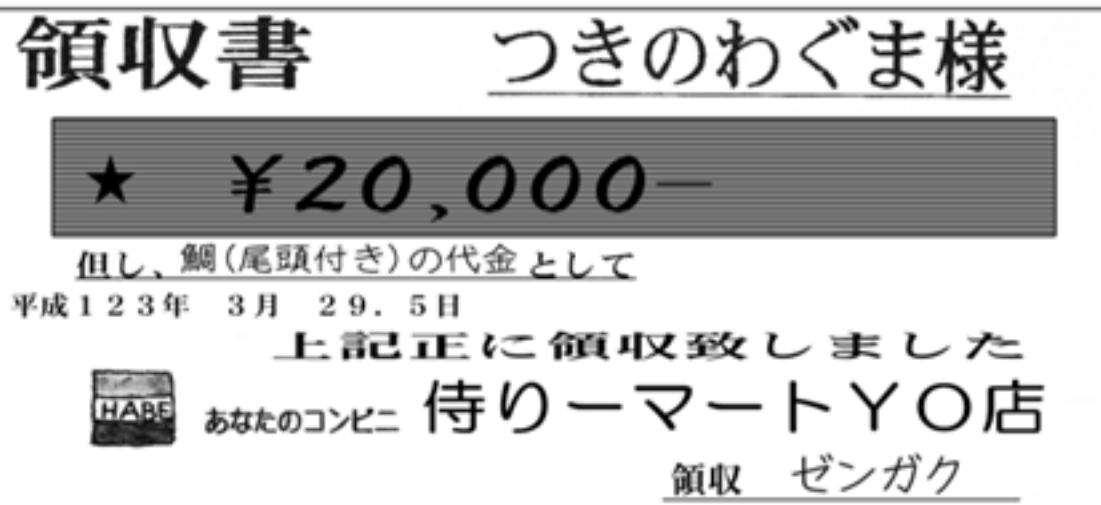
どこからか声が聞こえてきた。ひぐまだ。やはりひぐまだったのだ。ひぐまは生き延びていたのだ!! (しつこい奴だ…)

「なぜ何故生きとらすと?」

わぐまの驚きは、すでに博多弁を凌駕していた。

「ふつ、ワガハイは漫才拳を極めた男……変わり身の術など朝飯前よ。」  
そう、漫才拳法第9条には変わり身の術の方法がはっきりと記されていた。

「あー、あの鰯(尾頭付き)、かなり高かったんだぞ!! 領収書(下図)渡しとくぞ!」





「を、をい!!名前が俺っちになっとるばい!!どういうことぢゃい!!」  
わぐまに再び憤りと怒りが水の沸点100℃（気圧によって融通無碍〔…フレキシブルで  
変幻自在〕。）を余裕で超えられる程の勢いで煮えたぎり大爆発（ピックパン）が起こった！

「ゆ、ゆるせむ。（→機音便で「ゆるせん」）2万円の領収書を俺に押しつけやがって  
!!いくぞ!!」  
2人（2頭!?)の闘いは避けられるのだろうか、いや、避けられまい。〔反語〕  
「ほ、ほうう？？ええ度胸しとるやないけー。うけてたとう!!」  
ひぐまとわぐまは東京ドームへ次元のはざまを用いて2.78秒でテレポートした。そこ  
には、なんと侍り星人が何故か待ち伏せしていた。が、憤りの固まり状態の2人（2頭）  
は侍り星人をどっかにふっ飛ばしてしまった。さらば侍り星人……。そんな事を考えてい  
るうちに闘いの火蓋（火豚?）は切って落とされた!!

「う、うおおおお——————？」  
「ぬ、ぬああああ——————!!」  
ありきたりの雄叫びをあげながら2人（2頭）は突進した！

## ズゴーン、ズゴゴゴゴーン!!

お互いびくともしない。それもそのはずである。現実世界と夢の世界は左右が一部逆転し  
てはいるものの、ほぼ同じ理で成り立っている。つーまーりー、ひぐまとわぐまは基本的  
には性質に差はなく、質量保存の法則により同様に確からしいのだ。勝負の決め手は、漫  
才拳の熟練度にかかっていた。殴る、蹴るなどの暴行が30分程続き、両者ともそろそろ  
疲労が蓄まり始めた。その時、わぐまは腹部に激しい痛みを感じた。なぜならば、夢の世  
界でわぐまは“ナイスガイ”に変身しようとオーラを発していた時に撃たれていたのだ。  
その古傷が闘いの疲れで開いてしまったというわけだ。

「うっひっひ〇チャーンス!!」  
当然、ひぐまは2万円の鰯を手刀で刺身にされたうさ晴らしに、一発ギャフンッと言わし  
たる、というような感じで一墨側ベンチに疎外しておいた紫色のリュックサックの所へ駆  
けて行った。

「秘密兵器持ってきて良かった。どっかの国の通販で買っていたんだ。これを使ったほ  
うが漫才拳を発動した後で訳の分からぬ質問をされるよりはましたな？」  
客観的に見れば、明らかにひぐまの言っていることは意味不明だった。ひぐまは、ロンド  
ン橋を取り出し、それに12カラット位の緑色の小さな宝石らしきものを取り付けたのか  
もしれない。

「ひやッ ひょうビヒュカヒュケイレハレスレヘ……」  
またひぐまは叫んだ。

「わぐまが苦しんでいるうちにこれを唱えよう。“おデコの眼鏡でデコデコデコリ—  
ン”!!」  
妙な小言をひぐまが言った。と、その時わぐまは突然発生したブラックホール（黒穴）み  
たいなやつに吸い込まれ、夢の世界に放り込まれてしまった。一体、ひぐまは何をしたの  
であろうか。

「ふ、露のように消えてしまったか。哀れな奴め……イヒッ!!〔縁語〕」

実のところ、この後のガリレオ=ガリレイの調査でわぐまは、ひぐまが時空魔法“バケ

ツがき”を唱えたので夢の世界へ放り込まれたということが発覚した。スクープだ。

2分後、ひぐまは例のリュックを蔑ろにして、捨ててんげり（→捨ててしまった）。そして、「ふうー、さっぱりしたっ。」

と、まるで大雪原の中にぽっかりと潜む40.7~43.8℃ほどのアルカリイオン温泉につかった後のようすをゼリフをはき、地下鉄の駅へ向かおうとした。（帰るor銀行強盗or悪戯の為）その時に一言ひぐまはつぶやいた。

「謎とく!! [掛詞]」（＝“解く”と“得”で謎を解くことは得だ!!）

何故ひぐまがそう思ったかは誰にも分からない。そんなことを考えていると、まばゆい閃光がイースター島の沖遙か25000cm位の所からすっ飛んできた！（モアイもビックリ！）さっき二人（2頭）によってどこかへふっ飛ばされた侍り星人が仲間を1.5人連れてやって来たのである!!ひぐまは叫んだ。

「すい、すいむうわっとうあ～～!!!!黒幕の存在を!!夢の方とタッグチームで漫才拳をしなければ、地球は崩壊してしまう!!俺のもの（地球）を渡してたまるか!!」

一回聞いただけでは、勇者のようななかっこいいセリフに聞こえてしまうかもしれないが、よく聞くと、エゴや欲があからさまであった。

「ど、どうしようかなー。あいつは夢の世界だしな————。」

ひぐまは、結構楽しそうに悩んでいた。そして!!決断した。

「まっ、仕方ないな。もう一回召喚してやっか。これも地球を渡さない為だし、また用が済んだら封印すればええんやしな。」

相当勝手だ。

ひぐまは、地面（高級赤土粘土）の上に魔法陣を描き、そこに塩・胡椒少々、卵1個、牛乳1/2カップ、食パン1枚、バター5gを熱したフライパンに入れ、熱湯とよく混ぜてぶっかけ、3分間待った。そして、フレンチトーストを作るのを我慢し、魔法陣をドタドタと踏んだ。すると、140dB程の超大音量の爆音と共にやつB（=わぐま）が復活した〔王政復古〕。2人（2頭）は声をそろえて、

「よし、状況はわかっているな!!漫才拳ぢゃぞ!!」  
と言った。

## 第11代 ナボリタン大名

侍り星人は、その言葉を聞いていた。そして家来1に、

「ただ今、留守にしております。ビーという音が鳴りましたら、お名前と御用件をお話下さい。……ブ～～！今のはフェイントです。ビ～～！」

と、伝えるように命令した。そして家来2には、

「ただ今ピ～しております。留守という音が鳴りましたら住所・氏名・年齢・電話番号と、ご希望の商品を2つまで書き、128円切手をしっかりと貼って、ポストへ入れて下さい。」

と、伝えるように命令した。侍り星人は、どちらの伝言が伝わることになるかに、かなりのスリルを感じていた。

その頃、2匹の熊は目を閉じて瞬間移動を繰り返していた。まだ夜は明けず、世界はヒエラルキー（秩序）（注：冷えたハルキではありません。あかしらず）を強調していた。約

3秒後、2匹は侍り星人の元に辿り着いた。まだ見ぬ町へ一步踏み出すかのように。侍り星人のエース（民族気風・気質）は、最高潮に達していて、1.5人の家来は、迷子になっていた。それに対して侍り星人は強烈な憎しみを抱き、ニュアンス（微妙な感じ）の力を信じ続けていた。戦闘開始である。

最初に攻撃を仕掛けたのは、ひぐまであった。ピーマンを美味しく食べられるように、きちんとフォークを使った。侍り星人は加減乗除を考慮に入れて、すんなりと……さ、刺された!!

「あいうちか……」

わぐまは、囁いた。めちゃめちゃ嘘だった。先日、新発売された21世紀を見据えた128円切手は、デフレーションにより58円均一になっていた。自覚症状は無かった。

と、その時、家来が辛うじて帰り着いた。侍り星人が刺された瞬間を目撃した家来たちは駆け寄った。……侍り星人は爆笑した。

「貴様の無意味なお使いに苦しめられた純情な家来に向かってなんたる仕打ち～～は、侍り星人め～～!!」

と、わぐまは侍り星人に殴りかかった。と、見せかけて家来に攻撃した。

「漫才拳奥義、炎赤外線系温熱療法!!」

灼熱の炎が赤々と燃え上がり、家来を包み込んだ。……ような勢いで二人は手をつないで突進した。大ダメージだ!!

ある者の話によると、家来の皮膚は、2人の触れた所が焼けただれたように見えたということだ。

侍り星人は、怒り狂ったように刀を振り回した。それは、あたかも大道芸の如く、美しく、そして華麗であった。

「一撃自殺!!」

すさまじい爆音とともに、侍り星人は刀を振り上げ、自らの頸動脈をかっさばいた。しかし、侍り星人の首筋には、かすかな迷い傷が残っただけであった。どうやら失敗のようだ。

ちょうどその時、K<sup>\*</sup>は静かに息を引き取った。

「視力検査だ！」

の言葉とともに……。

## エントリーナンバー12番 ばけつがき

「何!? Kが息を引き取っただと？」

ひぐまは東京の辺りに住む大学生（エリート）から、Kが息を引き取ったという伝言をテレパークのような形で受け取ったのかもしれない。〔推量〕

「こ、こりや大変だぞ!! すぐに調査せねばならん!!」

ひぐまはいきなりマッハ0.05の猛スピードで走り出した。（足は壊れないのか…？）そして、約3分後にひぐまはさっき捨てたはずの紫色のリュックを背負い、なにか本を読みながら戻って来た。どうやらひぐまはゴミ捨て場へわざわざ例のリュックを拾いに行つたらしい。〔伝聞〕

「ウーム…何でKはここで息を引き取ったんだ？」

と、つぶやきながらひぐまはベンチに腰掛けた。一体何の本を読んでいるのか、気になっ

\*1 「K」…夏目漱石著「こころ」の登場人物。主人公が「先生」と呼ぶ人の友人。

たわぐまがその本を覗いたところ、その本は現代文の教科書の『こころ』（夏目漱石著）だと判明した。しかも何度も繰り返し読んでいる。どうやらこの日は現代文の授業があつたように自然と思われる。〔自発〕

「をい!!何で教科書の『こころ』なんか読んでんだ?」  
と、わぐまは聞いた。

「あのですねえー、太陽は地球の周りを回っているという曲げられない事実は現在形で表すんですよ…じゃねえよ!!こんちくしょう!!玄田牛一（→畜生）!!!」

『は?』と聞き返す間もなく、わぐまはひぐまのジャブ1発で10m程すっ飛ばされた。

「痛てーなあー。何で教科書の『こころ』を読んでいるのか聞きたかっただけなのに…。」

「あ、そうだったそうだった。スマンスマン。これをしっかりと読んどかないとKの自殺の理由が分からなくなってしまうからな。コンテクスト（文脈）をつかまにゃならん。」多少物忘れがひどかったのかもしれない。この時のひぐまは。〔倒置〕

しかし、このような状況にもかかわらず意外と冷静だったわぐまはある重要なことに気付いた。そう、この『こころ』は長編小説であるので、1回読むだけでかなりの時間がかかるてしまうのだ!!（2分～1日位）

\*面白過ぎ注意!!

だが!!!!\*（ダブルダブルエクスクラメーションマークぢやい。うひょひょーい!!）  
わぐまがその事に気付いたのは蔑ろにされ続けていた侍り星人が行動にタイミングより1.52秒、角度に直すと28度5分位（本当か？）遅れていたのだった。則ち、侍り星人は見事（？）先制攻撃に成功し（Congratulation!! So what?）、『こころ』を読みまくっていたひぐまにクリティカルヒットを咬ましたのだ!!しかし、侍り星人の物理攻撃は単独の場合、非常に威力が小さいのである。その侍り星人がクリティカルヒットを決められたのは、「キック」と言いながら顔面にパンチをするという、何とも言えぬ頭脳プレー（？）（IQ90～1億、内閣支持率によって変動）のおかげだった。

「痛痒いのお~。ぬうあにすんぢゃひ！（HP：12345677/12345678）」

と、ひぐまは侍り星人を罵るような顔で睨みつつ言った。やはり、クリティカルヒットとはいえ内閣支持率が低迷する今日この頃、侍り星人のIQがとても低かったので、的確な所を狙えなかったのだ。そして、ひぐまのターンが回って来た。

「よし、わぐま、カウンター攻撃だ！」

ひぐまとわぐまはカウンター攻撃の用意を刹那で済ませた。

何やら2つのボタンがあるようだ。

「漫才拳カウンター 夫婦円満・針十万本!!」

どちらが奥さんだかは不明だが、2人（2頭）の愛称は抜群に回復していた為、一瞬で技が発動した。わぐまは、ひぐまが針みたいな物をガトリング砲の如く撃っている間、ひたすらSELECT+○ボタンの連打をしていた。（おうえんだあ~い!!：「F.F.VIII エイト」より）その結果、侍り星人とその家来1, 2に2万ポイントのダメージを与えた。これは2人（2頭）の愛の賜物なのかもしれない。ドラマの名シーンみたいだ（超ウソ）。そんな風に感心している間に、0.5人分しかない体の為、体力も元々0.5人分しかなく、その上迷子になつたので著しく体力が消耗していた家来1が倒された。その事に気付いた2人（2頭）は喜びを手足や顔にさりげなく浮かばせ言い捨てた。

「ふつ（ログセ）、雑魚め……。」

どうやら、2人（2頭）は自分達の技で家来1を倒したと思っていたらしい。思い込みもいい加減にしやがれってんだ。この家来1にトドメを刺した者の正体を知っているのは、日本国民の10%程であった。それもそのはず、役に立たないと思って家来1に愛想を尽

かせた侍り星人が衝撃波を起こし、P波とS波のオリジナルブレンドで家来1にトドメを刺し、そして、そのP波S波を捉えた気象庁が速報として発表したので、少なくとも存在だけは一部の国民に知られていたのだ。ひぐまとわぐまは、

「し、しまった。(just) 1900年頃の有権者の割合を上回っている!!」  
と思った。その後は、侍り星人・家来2連合軍とひぐま・わぐまチームの情けない攻防戦  
が暫く続いた。

ところが！50分後にこの戦いの転換期（ターニングポイント）がやって来たのだ！！

侍り星人は普通通りにひぐまに殴り掛かろうとしたのだが、次第に戦いに飽き始めそろ  
そろ意表を突こうと考えていたひぐまに、パンチをあっさりと躊躇されてしまったので、侍  
り星人は見事かつカッコよくすっ転んでしまった。侍り星人は膝の切り傷をなめ、そして  
半ベソをかきながら言った。

「うっ…うっ…意表を突くなんて卑怯ナリ!!…グスッ…覚えてろよダブルベアめ…ママ  
に言い付けちゃる!!」

どうやら侍り星人は結構年少だったようだ。

「家来2、一旦退却だ!!おうちに帰らないとママに怒らりるじょ！」  
侍り星人は尻尾を巻いたような感じで走り去って行った。（空中を）ダブルベア（ひぐま  
&わぐま）はニタニタしながら笑った。

「ふっ（ログセ）…足程にも及ばない奴だったなあ。〔詠嘆〕ところで、夢の世界の奴  
よ、“ダブルベア”って一体何だべ？」

「さあ～～？」

当然の事ながら、2人（2頭）は自分達の事がひぐま・わぐまと呼ばれている事なんて知っ  
ているはずもなかった（多分）。では、何故侍り星人は2人（2頭）の事を“ダブルベア”  
と呼んだのか——それは単なる偶然であった。

そして、侍り星人はすっ転んで自分の星へ慌てて帰つて以来、二度と地球には戻つて來  
なかつた（と思う）。これで戦いは終わったのかもしれない。悪しからず。

一方、侍り星 [DATA：等級-35、絶対等級7万、地球からの距離2光年×1~2パー  
セク、公転の軌道はその時の気分によって著しく変化。誰かが操っているという説もある  
?] では、地球を襲來したあの侍り星人の母親（3歳）が本当に首を長くして（10m  
位？）、自分の息子（名前：ジミー=ゴンザレッス・1歳）の帰りを待っていたのだった。

因みにここで、あの前島密が開発した自動切手販売機を密かに改良して作った宇宙未知  
生命体調査機で調べた侍り星人の極秘細密情報、所謂データを示しておこう。調査代表者はスライム（の友人？明智光秀）。

体調は標準で1~3m。成長スピードは普段は葉並み、最大ではゴジラ並である。（但  
し、濡らした脱脂綿の上に乗せ、2~3日暗所に置く必要あり。）体重は約2mg~1t。  
皮膚の色は、従来は赤・緑・青・黄の4種のみだったが、最近（'99年11月頃）になつ  
て金・銀が発見された（新種）。何かメタリックなにはひがします。その他のデータは第  
2号を待て!!第1号は創刊特別価格5.8円均一です。〔データ集第1号より抜粋〕

そして、侍り星時刻午後5時92分（例の6時のチャイムが鳴る8分前）にようやくジ  
ミーが帰つて來た。まだ泣いていたが。

「た…ただいま…（グスッ）……お腹空いたよー。」  
ジミーの母は睨みながらジミーに応えた。

「お前、こんな遅くまで何をしてたんだい？『お腹空いた』じゃないよ。『良い子の皆  
さんは家に帰りませう』の放送はとっくに過ぎてんだよ！まったく…」

ジミーの母はこの時、かなりの怒りと慣れと憤りを感じ、旋頭歌を頭に浮かべていた。

では、ここでデータ集第2号を一つ紹介しよう。まあ族のほほん茶でも一杯飲んで、気楽にのほほん茶族、てな感じでどうぞ。

侍り星人の物理攻撃は非常に弱いのだが、何故か力は非常に強く、通常状態でもサイクリングで新潟を、『面白そうだね。』『本当に面白いよ。』なんて感じのヨユーぶりでラクラクと運ぶことが出来るらしい。（但し、物理学上の話）そして、母国語は何故か侍り星全共通で日本語。昔はヒンディー語など、民族によって異なる言語があったのだが（90種以上）、いつしか勝手に満州鉄道爆破と毛沢東のモーレツな圧力とパワーによって日本語に統一された（らしい）。言語の統一は、毒草カルニ=マグイッチ<sup>\*1</sup>とカルイッチ=マグニとの絶妙なバランスが取れた時の様なバランス力（ex. コリオリ力）が必要である。大変だあーねえー。〔データ集第2号より抜粋〕

話はジミーの弁明に戻って、ジミーは遅くなつた理由を述べた。

「ちょっと遠くで遊んでた……。」

「ハッハーン？（オーラルの医者風の言い方）まさかお前、地球にや行ってないだろーねえー？」

ジミーの顔がみるみるとやや紫がかかった青色に変化していった。これはヨウ素液による反応だな？この反応を見て、ジミーの母はジミーが地球に行ったことを確信した。ジミーは、ジミーの母が確信の表情を見せたので、遂に観念した。

「は、はい…行きました。征服する為に。」

「な、何ー!!!!ち、ちょっとこっちに来なさい!!!!!!（トリプルダブルエクスクラメーションマーク）」

結局、ジミーは母親に侍り星時間で2時間6分の説教を受けさせられた。ジミーの母親がこんなに夢中になって（？）ジミーに説教をした理由は、侍り星政府が、爆発的に増加している地球で暴れる侍り星人対策として「地球暴走禁止令」をつい最近出したばかりであったからである。因みに、この「地球暴走ブーム」の切っ掛けは、今侍り星で老若男女を問わず大人気の粘土アニメ「次男・三男超結合体ニセメガギンコウマン△」が原因なのではないかと、ジャーナリストはみている。

「地球暴走禁止令」に違反したジミーはたまたま刑事责任を問われる2歳以上ではなかつたので、警察沙汰にはならず、説教のみで救われた。そして、ジミーは母親にもう地球を襲わないという誓いを書かされて、事態は落ち着いた。

その頃、地球（日本）ではダブルベア（ひぐま&わぐま）の24時間耐久剣の舞いとタップダンスが行われていた。（おそらく、ギネスに挑戦の為と自然に思われる〔自発〕）が、しかし開始から2時間程経過した頃に、両者とも疲れが出たのか、突然ピタッと踊りを止めてしまった。そして、再び次元の狭間を用いて5秒後に（少し渋滞してたので時間がかかった）、白骨温泉（長野県の西境、乗鞍岳の中腹にある温泉）に辿り着いた。

「フゥー。ここならいい奥義が完成しそうだなあー、現実のヤツよおー。」

「ああー。さて、温泉に入ろうか。」

そうして2人（2頭）は、温泉に入ろうとした。んが……

「何ー!!入湯料を取るですと!?!」

2人（2頭）は入湯料がかかる事に気付いていなかったのだ。（普通は金取るよなあー。）

故に、熊（×2）悩む!!

「なあ、夢のヤツ、お前さんはいくら持ってる？俺は120円持ってるが…。」

「あ？5円玉3枚と10銭玉が7枚……と、和銅開珎<sup>わとうかいちん</sup>が41枚だけだ。」

\*1 「カルニ=マグイッチ」…1998年頃から旧山之内製菓が発売していた栄養補助食品「ヘルシーバランス」のCMキャラクター。カルシウムとマグネシウムの割合が2:1であることが由来。付け鼻のSMAP稲垣吾郎氏が、マラソンで「独走」していたことを記憶している。

「をい!!もっとまともに使える金持つとけよ!!この5円だって菊の紋章が入ってるし…。」「スマンスマン…これはおいどんの趣味なもんでな……買う?」「だれが買うかあー!!……あ!!いいアイディアが浮上したまふぞ!!」  
ひぐまは何か迷案が浮かんだらしい。怪しい言葉遣いが何よりも証拠だ。ひぐまはわぐまにナイショ話をすると、気を溜め始めた。

「漫才拳・第1章22条5項の2号!!テレポート!!」  
うーむ、わざわざ温泉入るにテレポートするとは……いとあさましかることよ!!（驚き呆れること）

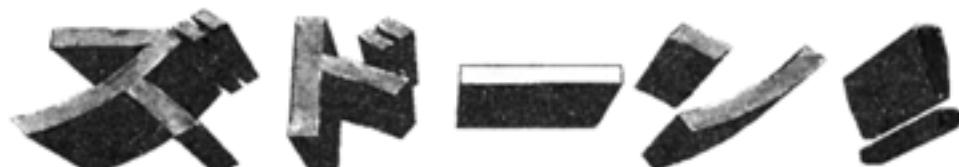
テレポートで温泉に入った（着衣入浴）ダブルベアは温泉につかりながら新奥義を考え始めた。そして、1時間後にわぐまが新奥義……ではなく、鼻血を出してしまった。きっと長湯で逆上せたのだろう。

「あっ、鼻血……チリ紙はないか？うおー!!」  
「ふつ（ログセ）、漫才拳パクリ系『ちりよう』を使えば、一発で完治さ。」  
と、ひぐまは独り言を言い、あっさりとわぐまの鼻血を止めてしまった。こりや便利。  
そして、わぐまの鼻血を止めた直後に、2人（2頭）は思いついた。いきなり。

「白…白か…白といえば…あっ!!思いついたぞ!!」  
2人（2頭）は、新たに奥義を編み出してしまったようだ。

「よしつ!!命名だ!!漫才拳奥義・半アンデッド系S・S式ホワイトアタック!!」  
名前からしてまったく効能が分からぬ奥義である。使ってみるまでこの効果（エフェクト）はお楽しみだとしか言いようがなかった。

### 13レーン ドナドナ



…といきなり富士山（不死山）が大爆発した、のとは全くの無関係で一機の「何か」が墜ちて来たらしい。文法が〔推量〕になっているのでひょっとしたら墜ちて来なかつたのかもしれないが、多分、性懲りもなく多分だが（こんな言葉ないぞ）、いや事実上…うーん、何が何だか分かんないぞ……ムフ♡

〈中略〉

「ここが地球かい？」  
と、「何か」から出て来た誰かが言ってみた。（取り敢えず言ってみただけで、う~ん、他に言う事もないや）

と、それから3年後、その「誰か」（バラしちゃうとアレとは別件の侍り星人の『ピー』なんだけど←バラしてない）はやっと車をチャーター（当然盗みを働いたわけで）してどこに向かった。しかし、向かった先は不幸にも青木ヶ原樹界だった。当然の如く、その「誰か」は迷った。しかもガス欠。そしてガス欠の30秒後、空腹とショックで「誰か」はこの世を去った。どーやら侍り星人の母なる人（星人）だったらしい。やがて、その3日後に奇跡的に発見された。（本当にスゲー事ですなあ）侍り母は真っ黒な箱に入れられて、取り敢えず燃やされた。そして、お通夜（か？）がひっそりと行われたが、人が来るハズもなかった。あまりにも寂しかったので侍り母は生き返ってみたが、特にやる事も無

かったのでまた死んだ。そこへ、あの高名な熊ブラザーズ（ではないが）がやって來た。  
そしてわぐまが申し上げるには〔謙譲〕、

「何じゃこりや？蹴ってみよう。」

と言っておいて、殴った。返事がない。ただの屍のようだ。

そこへ!!侍り母の不幸を知つて侍り星人（子）（父）が駆け付けて來た。

「おぎゃー！おんどりやが殺したんかえー!!」

と言つていきなり熊軍團に襲いかかつて來た。……が、彼らは弱かつたので熊達によつて  
あっさりと倒されてしまつた。この事で調子に乗つた熊達は、侍り母に火をつけてみた…  
…ら……ガビヨーン!!侍り母が生き返つてしまつた。そして、侍り一家は合体して399  
9mにも及ぶ巨人になつた。変身した彼らにとつて、もう恐いものは無かつた。

「死ね！熊藏！」（何やら天才の人々が言つてそうなセリフだったが、まーいーや。）

しかし、熊達は全く驚いてはいなかつた。



「ふつ・ふつ・ふつ（ログセが3回）。こんな日の為にオレ  
らは、フュージョンを完成させさせていたのだ。」

と、ひぐまは余裕綽々<sup>しゃくしゃく</sup>で言つた。そして、あの奥義を使ったの  
だ。しかも略した名称でほざきやがつた。

「アンデッドSS（製薬）！」

すると、熊達は“カッ”という光に包まれて見事に合体した。  
全長4999m…で…でかい。……と思ったが、頭から生えて  
た角が3999mを占めていたので、実際の身長は1000m  
程であった。しかも頭がでかかった。

### 〈中略〉

いきなり、侍り合体星人（以下ハペリン）の指から赤い液体が出て來た。そんでもって  
それは、合体熊野郎（以下クマリン）を当然の如く襲つた。

「ぬぬっ、なんだこりやー！ネバネバする。」

クマリンはもう意識が遠退いちゃつたって感じだった。

「そーいえば、新潟に69万円で買える家があったなあ（実話）。死ぬ前に買つとけば  
よかったですー……。」

なんて思つちゃつたりもした。そんでもって、

「ミニ四駆ブームはどこにいったんだー！ブームが去る前に、グレートジャパンカップ  
に出場しときやーよかったですー……。」

とかも思ったのかもしれない。そして、クマリンは死ぬ準備をした。といつても、死に方  
が分からんかった。仕方なく息を止めてみたが、30秒も持たなかつた。ここでクマリン  
は初めて自分の根性の無さを痛感した。（というか、自分が死ぬまで息を止めてられる人  
なんていないとと思うけど。）そして、そして、（ダブルバインド効果）もう生きる氣力も  
死ぬ氣力もなくなつたクマリンは……どうしたもんだろー。

### 〈中略〉

色々考えた末に、クマリンは気付いた。

「そーだ！生と死の中間があるじゃないか。」

と、安易に哲学的思想を実行しちゃつたりなんかもした。そう、死にもせず生きもせず…  
…って、これはどーゆ一事なんだろーね。ひょっとすると生きてるクモの足とかを引っこ  
抜いた時に生じる、「あ、この足動いてるよー」的なものか、それとも俗に言うゾンビな  
のか、なんて筆者は考えた。でもまあ高校生程度にこんな問題は解ける訳ないので……。  
(誰だってムリだと思うが…)

と、まあ沢山考えているうちに、ハペリンが死んだ。どうやら赤い液体は血液だったらしい。

「なんだ、そーだったのか。」

と、クマリンは納得した。ハペリンにとっては捨て身の攻撃だったらしいが、要はただのペトペトな液体で、相手の気分を悪くするという効果しかなかったらしい。

「よし、戦いは終わった。元に戻ろう。」

とクマリンは合体解除の呪文を唱えた。

「バルス (by ラピュタ…か?) !」

……ん? 何か変だぞ?

「これって破滅の呪文ぢゃん。」

クマリンも唱えた後にやっと気が付いた。そう、これはかの、天空の城の魔の呪文だったのだ!! (ホント?) でも、気付いた時にはもう遅かった。

「うっわー! 空からロボとか、そりゃーもう財宝とか降って来ちゃうよー! でも、飛行石は空の彼方に消えちゃうんだね…。」

とか言ってるそばからクマリンは爆死(死)した。そう、あくまで爆死(何て読むかは不明、だけど“バクチョン”と仮定)なわけで死んではいないのです。でも、生きてもいませんでした。そうです、彼は遂にあれ(生と死の中間の状態ね)になったのです。(急に敬語になってるが) 彼は歓喜しました。もうスンゲー嬉しかったので、かのクラシック音楽界最強の男ベートーベン(人によってはモーツアルトとかJ. S. バッハとか言うかもしれないが、筆者は何があろうともベートーベンから譲らないぞ……とそんな事はどうでもいい)が残した交響曲の最高最強傑作の第九(これもどーでもいいけど自前の第五番か第六番だと思うなあ)を歌っちゃったりした。(これはあれだね、俗に言う歓喜の歌だ)

しかし、ここで問題は起こった。そう、彼は英語はペラペーラだったが、ドイツ語は赤子よりも出来なかったのだ。これは史上最大、空前絶後の大問題であった。

……カミ……

割合楽に、というか、事実上3秒で答えは出た。

「『ラ』で歌えばいいじゃん!」(←普通の人は考える前に実行してるとと思うが……)と、あれになったクマリン(以下あれぐま)は自分の頭の良さに感激して、もう涙ぐんで歌った。それからしばらくして、あれぐまは気付いた。

## 「オレって超、歌上手いじゃん!」

勘違いもいい加減にしてほしいもんだと思ったが、実は本当に超上手かった。かの世界一と謳われた指揮者のフルトヴェングラーも、悪魔に魂を売ったとか何とか言われてる超絶バイオリン奏者バガニーニも目ん玉ひんむいて驚く程の上手さだった。(事実上太ってる人って歌が上手いんだよなー。筆者もキャイーンの天野君の歌の上手さにはホントにビックリ仰天だった。……でも、彼(A B E君ね)って実際には歌あんまし上手くないけど、っていうかむしろ怪しい歌声だね。オラも同じよーなもんだけど。) あれぐまはどーにかけてこの歌声を大衆に聞いてもらいたくなつた。

……カミ……

彼は中間の存在(中間人)だったので生きてる人にも死んでる人にも、聞いてもらえなかつたのだ。彼はすんげー悲しくなつたので泣いた。でも、何も起きなかつたのでやめた。そして愚痴をこぼした。

「くそー、他に中間人はいねーのかー!」

彼はもうやけくそだった。“自暴自棄”になって自分を殴ってみたが、痛いのでやめた。

なーんて繰り返しているうちに、なんと神様が現れたのでした。（何かスケー展開だ）  
「君は今までとっても悪い事をしてきたけど、今日はとってもいい天気だし、私の機嫌  
もいいから、願いを一つかなえてあげよう。」  
意外と神さまっていい加減なんだな、なんて考えもせず、あれぐまは即座に答えた。  
「オレを生き返させてくれ！」  
神様は何も迷わず、その願いをかなえてやりました。

……んヵ……

神様は「願いをかなえるかわりに一つ大事なものが消えてしまうよ」と付け加えるのを  
忘れてしまっていたのです。おいしい話には裏があるとはいいますが、こいつは本当に痛  
かった。そう、あれぐま（普通の人になったので以下ABE）は“生き返る”かわりにあ  
の素晴らしい“歌唱力”を失ってしまったのです。しかしABEはそんな事があったとは  
知らず、デモテープ（“あれぐま”の時に録音した奴ね（どーやって録音したかは不明））  
を音楽界の超有名な人々（many）に送ってしまったのです。この出来事は、もうマジでピッ  
クラこいちゃう程でした。もーはっきり言っちゃうと、うただピカルもシャルロット・  
チャーチも目じやない程でした。（この二人は比べらんないが……）

そーこーしてるうちに、な…な…な…なーんと、ベルリンフィルと一緒に歌うことになっ  
ちましたのです。

〈中略〉

## エピローグ

結論から入ると、奴は死にました。（今度こそ本当に）はっきり言って、ベルリンフィ  
ルとのキョーエンなんて無理だったんだよね。てゆ一か、実は今までの事は全部、ABE  
氏の夢だったので。ABE氏は最後に（ここでは書けない程のストーリーがあの後あつ  
たらしい）スンゴイ悲惨な夢を見て寝返りを打って、高層マンションの100階から落ち  
て死んだのです。でもって、彼だけ殺してしまうと絶対に彼はキレるので、雄介くんも死  
んであげることにしました。雄介君は実はもっとスンゴイ（どんなだろう）夢を見て寝返  
りを打って、顔面強打して死にました。

……とゆ一わけで、この悪夢はおちまい。

最後に、死んだ彼らの為に友人のワタル氏が作った、一行詩によってこの話の幕を閉じ  
ることにしましょう。（本当は作っていないが）

いつだ？

友よ、僕らはあの熱かった時代を  
決して忘れはしないだろう。  
ちなみに君らのお墓だが、  
雄介氏の方は手厚く葬っておいた。  
他は……  
知らん。

1999年 4月25日 自宅にて  
Mn. Yusuke ここがミソ

## あとがき① — 一人言エッセイ —

皆さんは、3大巨悪マンガを知っているだろーか？

知らないだろうから私が教えてあげましょう。 [敬語]

3大巨悪マンガとは暴露しちゃうと「キャプテン翼」と「アンパンマン」、そして「ドラえもん」の事である。「え？ どれも素晴らしいマンガじゃないか」とほとんどの人が思っているだろうが、それはあなた方が重要なポイントを見逃しているからなのだ。今日はこのマンガに隠された悪を皆様に明かそうと思う。しかし、これらのマンガの一途なファンだという方々には非情な大打撃をくらうかもしれないで、ここで足を止めてもらいたい。それでは恐怖の扉を開けるとしよう。もう帰れないかもしれない「素晴らしいマンガ」のイメージに別れを告げて。

### 第1章 キャプテン翼

まずは「キャプテン翼」の悪の世界をご覧いただこう。彼は言わずと知れた超天才エースストライカーだ。しかも、顔も性格も素晴らしいGoodである。しかしそれは嘘であった。彼は第1巻で坊さん頭の少年に対して「ポールは友達さ、恐くなんかないよ」などと言っている。普通ならスラッと読み流しているセリフだが、ここに悪が潜んでいたのだ。彼は“ポールは友達”などと言いつつボコボコに蹴りまくっているのだ。驚きである。どこの世界に“友達さ”などと笑顔で言いつつ、その友達をボコボコにする人間がいるだろうか。翼君からこの言葉を初めて聞かされた友達はさぞ恐れおののいたことであろう。しかし！ だ、このマンガの恐怖はここから始まるのである。なんとこの言葉を聞かされたその坊主君（仮）は納得してしまったのだ！ ガッショーンである。さらにその後も翼君の周りには“彼の親友（ポール）”を蹴りまくる奴らがどんどん集まってくるようになるのだ。挙げ句の果てには殺す奴らも出て来てしまうのである。

翼君に勝手に友達にされ、ボコボコにされ、殺されてゆく。まさにポールにとっては阿鼻叫喚の地獄絵図であっただろう。「ただのポールだった方がどんなに楽だったんだろう」と、ポールの魂の叫びが聞こえて来そうである。

その他でも、このマンガには恐ろしい人が沢山出てくる。

例えば、「僕は翼君にバスをする為に生きてきたんだ」とか言ってる奴や、万年補欠のくせしてずっと翼君にひつづいている金魚のふんみたいな奴がいる。お前ら本当にサッカー楽しんでんのか？と言いたくなる。

### 第2章 アンパンマン

これもまた素晴らしいマンガであろう。だれもがアンパンマンの顔を一度は食べてみたいと思ったことがあると思う。しかし、これも恐ろしいマンガなのだ。

このマンガの恐ろしさは二つある。（あるいはいっぱいあるが、ここでは大きい二つの悪について話そう）

一つは、主題歌に悪がある。（多分気付いてると思うが）“愛と勇気だけが友達さ”的フレーズだ。ほとんどの人は、「愛と勇気だけが友達なんてかわいそーな奴だよな」と浅い考へで終わるだろうが、実はまだ奥があったのだ。考えてみてほしい。劇中でのアンパンマンには、食パンマンやカレーパンマン、その他にもカバ夫君とか色々と友達らしき人々（？）が沢山いるではないか。アンパンマン自身も友達のように彼らと接しているようだ。おかしい、これはスゲー矛盾している。アンパンマンよ！ 君の友達は愛と勇気だけじゃないのか？ と、もがき苦しんでいる人もいるのではないだろうか。しかし冷静になってよ

く考えてみるとおのずと答えは浮かんでくるだろう。…そう！食パンマンや他のみんなとの友情は“偽り”なのだ。これはヒドイ！まじでヒドスギル！表ではフレンドリーに振る舞っておいて、裏では彼らを見下していたのだ！いや、それだけではない。時々やる特別番組で「みんなも僕と一緒に歌おう！」なんて視聴者の皆様に声を掛けていたことから、

毎週放送を楽しみにしている子供達やごくたまに見る一般ピーポーまでをも奴は見下していた事になるのだ。くっそー！まじで許せん！

…とここまでにしておいて二つ目に行こう。

二つ目はバイキンマンについてである。一見のほんと繰り広げられるアンパンマンとのバトルだが、ここにも悪があったのだ。単刀直入に言おう。バイキンマンはアンパンマンを殺そうとしているのだ。あの偽善者アンパンの野郎でも「悪いことをする奴はこらしめてやろう」というだけでやっている。これはアンパンマンの決め技からも分かる。本気で殺すつもりなら素手でかかっていくよりももっと確実な方法があるのだから。

しかし、バイキンマンは違う。たまにカビルンルンとかお茶目な方法を使うこともあるが、8割方、彼は本気でかかってくる。何やら怪しい飛行物体からでっかい手や足を出して握り潰そうとしたり、踏み潰そうとしたりするのだ。これをされたらまず本当にあの世行きである。さらにこれだけにとどまらず、のこぎりやハンマー、ドリルなどなど様々な恐ろしい武器を使って彼は襲ってくる。これをリアルな映像で見せられたら、どんなに震え上がることだろう。

「今日こそ倒してやる、アンパンマン」とかのほんとしたセリフをほざいているバイキンマンだが、お前のやろうとしている事は、そんな生易しいものではない。そこんところをわきまえてほしいものだ。



その他では「食パンマンとかカレーパンマンの顔はどこで替えてるんだ？」とか、「同じ動物なのになぜチーズだけ言葉がしゃべれないのか？」とか、謎は多い。中でも「アンパンマンの脳みそはどこか？」という謎は最大の謎である。彼は顔が無くても元気が出ないだけで生きていけるのだ。一つことは、脳みそはどこにあんだーって話になってくる。しかし、道で迷った時に頭なし人間が出て来たりしたら普通ビビりまくると思うんだけどなあ。それにいきなり「僕の顔を食べなよ」とか言うけど、実際にこんな事あったら失神すると思うぞ。ゼッテーに。



# カレー

案の定、右の3人の  
中ではカレーが  
最下位でした。

アンパンマンの  
人気投票で



# あくまで仮説



ついにオレは  
アンパンの秘密を  
握った…

# 世界のおわり



オレ最近  
よく考えるん  
だけどさ…



でも、  
人気のない原因は  
何なんだろう?

あーあ…  
また荒れるぞ  
カレーの奴…



オレは今まで奴の「頭」を  
弱点だと思っていたが…  
それは全くの  
嘘だつたのだ…



オレらの  
住んでるこの  
島(世界)って  
何なの?



↑ カレー汁発射!



今はどいか  
知らんけん  
昔はあ  
あの頭は  
フエイク  
だつたのだ!  
あの頭は  
やつだつたのだ!  
胸のあのマークっぽい



そーいえば  
カバとかウサギは  
喋るし、そのくせ  
異星人みたいな  
ばつかと思ったら  
犬は喋らないし  
人間もいるし…



いいけど  
頭ナシで平氣で  
生きてる奴を  
想像すると  
怖えりうつ!



でも  
一番変なのは  
オレ達でしょ…  
あと天井とか  
おむすび系

よくわかつてんじゃん…



「人」っていう字は……人と人が支え合ってる意味があるらしい：

岬くん

岬くんが「お父さんはどこで生まれたのか？」と聞いていた。  
（かき笑顔）

**もしも**

「もしても、  
のび太君とトライエモン  
が同時にショサイアン  
に激しい憎悪を抱いたら……」

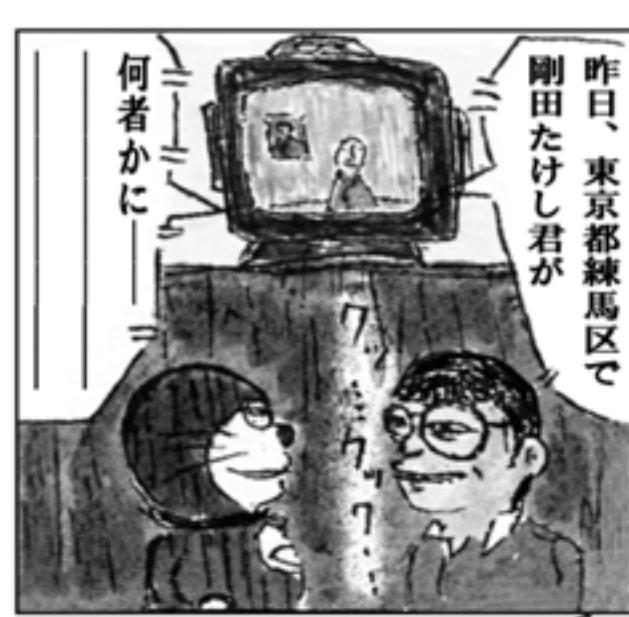


そこで その晩……  
つばさ君は考えました

岬くん だけに生まれたためにバスにパ・スするだけに生まれたため 「オレ」



までよ……じゃあ  
オレが死んだら  
岬くんはどうなるんだ?



### 第3章 ドラえもん。

最後に史上最悪のマンガ「ドラえもん」について語るとしよう。このマンガは注意をして見なくてもそこらじゅうに悪がちりばめられている。フジコフジオFさんはとんでもないマンガを作ってしまったのだ。しかももっと恐ろしいことに、このマンガは世界の至る所で放送されているのだ。ハッキリ言おう。これは子供の見るマンガではない。大人のマンガなのだ。今すぐにでも文部省に年齢指定をしてもらわないと困る。このマンガは戦争の引き金にもなりかねない。とまあここまでにして本題に入ろう。

このマンガの悪でとってもポピュラーなのが、ジャイアニズムという思想である。「オレの物はオレの物、お前の物もオレの物」という言葉は非常に有名で、日本のガキ大将の約9割がこのセリフをモットーとしているほどだ（ウソ）。もうこの思想だけで、そこいらで巻き起こっていた戦争の理由にカタがついてしまいそうだ。スゴイ、スゴスキル。この他にもジャイアニズムはそこで渦巻いている色々な問題にも応用することが出来る。リストラされる社員にも、オリンピックのあの問題にも…だ。しかし「ドラえもん」というマンガには、このジャイアニズムに勝るとも劣らない“法則”が隠されていたのだ。それはドラえもんの話の約6～7割を占めるあの“黄金パターン”にあった。

#### 資料

##### 〈ジャイアニズムの基礎用法〉

- ① オレの物はオレの物、お前の物はオレの物
- ② オレは今気分が悪いんだ（人を殴る時などに使用）
- ③ 友達じゃないのか？（人から物をぶんどる時に使用）

##### 〈応用〉

わが永遠の友よ！（人にお礼をする時に使用。これで全てが許されるらしい）

##### 〈弱点〉

母ちゃん

#### 黄金パターンを整理してみるとこうだ！

- ① のび太わけもなくいじめられる。（時にはくだらん理由もあるが）
- ② ドラえもんに仕返しの為の道具を出してもらう。
- ③ 仕返し開始。一時的に成功。のび太ちょーしにのっていたづら。
- ④ 最終的に失敗。のび太ボコボコ。→〈完〉

こいつはひどい。ちょーしにのるのび太も悪いといえば悪いのだが……。まあいつもいつもこんなパターンで終わるわけだが、このパターンはよく見るとマジで恐ろしい。まるで世の中を風刺しているようだ。まず①だが、わけもなく（ジャイアニズムによる）いじめられている。デパートのおもちゃ売場でドラえもんのビデオ放送がされているのをちらりと見た時、（座り込んで小さい子供たちと一緒にになって見てたんじゃないぞ。いや、ホントに。）①の段階を子供たちが見て、「のび太ってバカだよねー」と言ってるのを聞いたことがある。のび太は全然悪くないのに…だ。もうこの時点でとんでもない状態だというのはおわかりいただけるだろう。次に②だ。ここで重要なのは“道具に頼る”という事と、“簡単に助け船を出す”という事だ。これによって今まで一生懸命親が教えてきた“自分でやり遂げなさい”的な教育は全くの否定となるわけである。では次に③だ。ここでのび太はハムラビ教典「目には目を～」の教えにのっとり、反撃を試みて一時的成功をしている。これによって親の教える“暴力じゃ何も解決しないのよ”が全面的に否定されるのだ。ここまででもとんでもなくヤバイ。今までの2大巨悪マンガをものともしない恐

ろしさなのだ。というのも、この「ドラえもん」には2大巨悪マンガの巻が全て含まれているからなのだ。「キャプテン翼」の“友達ボコボコ問題”はジャイアンによって解決。「アンパンマン」の“偽善問題”もジャイアン。そして“バイキンマン問題”はのび太の度を越えた仕返しで解決している。この事で、このマンガの本当の恐ろしさを肌で感じてもらえたと思う。それを踏まえて最後の④に進もうと思う。この最後の段階で“黄金パターン”の真の恐ろしさが分かるのだ。④の内容は「失敗、のび太ボコボコ」である。普通に考えると「ちょーしに乗る奴は失敗すんだよな」みたいな教訓で終わってしまうが、①から④までをずっと見直してみて、何故このパターンが毎回続く事が出来るのか考えてみよう。それは何故か、なんでだろう。うーん……分からないぞー！というあなたの為にヒントをお出ししよう。ヒントはのび太にかかっている。さて彼の運命はどのように始まって、どのように終わったのか。彼は悲劇に始まり悲劇に終わっている。結局はのび太の不幸かジャイアン達の勝利に終わっているのだ。これはどーゆ一事かと言うと。单刀直入に言うと、こんな風になる→

「弱い奴は何したって結局強い奴にはかなわねーんじゃ ボケ！」  
ということだ。

これ一は一マジで恐ろしいぞ。こんなパターンを毎回見せられたら弱者は何もやる気を起こさなくなっちゃうし、強者はますます付け上がるだけじゃないか！いや、もうホントにギャグじゃなくマズイ。例えこれが“全世界で当たり前の法則”でも、これを無邪気な子供達に見せるのはあまりにも酷で、危険だ。

…とここまでさんざんこのマンガの巻を暴いて来たが、これでは全世界のドラえもんファンに申し訳が立たないので解決策を立てることにしよう。一番良い策としては、年齢制限をする事だ。<sup>みじ</sup>けどこれじゃあまりにも惨めなのでこんな策を考えてみた。まず、親が同伴して見ることだ。そして、所々に出て来る危険な描写を1カ所1カ所丁寧に取り出して放送が終わった後にゆっくりと話し合うことだ。もしも子供が忘れっぽい性格なら、この後のクレヨンしんちゃんでも見せて記憶を消せばいい。これでも悪の道に目覚めてある日突然ジャイアニズムを口走りだす子供が出始めるかもしれない。もうこうなったら“素晴らしい正義の世界”は捨てて、“汚れた悪の世界”に身を投じるのを見ているしかない。

「ああ、わが子は生まれながらに悪の子だったのだ」と、嘆き悲しむしかないのだ。なんなら一緒に協力して悪の帝王になるのもいいかもしないけど……。

あーやっぱダメだ。ますます悪い方向に行ってしまう。残念だけど解決策ナシだわ。スマ。もう疲れたから眠らして。Good by……

ちなみにドラえもんはこの他しづかちゃんのあのシーンとか、金の力を自慢しまくるスネ夫とか巻なシーンが大量に垂れ流されている。

### 【最後に……】

どうにかこの3大巨悪マンガが  
あなた方の良き反面教師にならん事を  
心から願わんばかりです。

ホントはドラえもん大好きなJ.J.君より（マジック）





トマ

トマ

トキト

トキト

トマ

トマ

前略 草壁誠一郎様

あなた様がお帰りあそばされ、再びお会い出来る日を心待ちにして参りましたが、どうやら其も叶わぬこととなりそうでございます。御約束を守りきれぬ私をどうぞお許し下さい。美鈴は程無しに天上へ参ります。只一つ、あなた様と添い遂げず逝かねばならぬ事だけが、心残りでなりません。せめて、草葉の陰よりあなた様の御好運をお祈り申し上げております。どうぞ良き御方と巡り会い幸福にお過ごし下さいませ。

来世でまたお逢いできますように……

いまいづみみすず  
今泉美鈴

大正××年 東京——

「風鈴売り？え？もう10月になつたって云うのに？そりやまた時期外れな。」  
俺は匙を衡えつつ目を丸くした。

「そうなの。其も夜、川端なんかを売り歩くのですって。何だか氣味が悪くって。」  
やや騒ついた喫茶店で着物を着た若い女店員が話す。この娘は、尋常小学校時代の同級生で、高等女学校を卒業した後、この店に就職し、働いている。俺はよくこの店に来て、この娘と時々世間話などをするのだ。

「百合ちゃん。其を見た事あるのかい？」

「いいえ。でも夜中にたくさん風鈴が鳴っているのを聞いた人が何人もいるそうよ。」

「なんだ。じゃア只の噂だよ。気にする迄も無い。」

「そうかしら……だと良いのだけれど……。栄さん、お茶もう一杯要る？」

「ああ貰うよ。」

ふと俺は、和と洋が単純に混合された店内のある1人の男が目に留まった。知っている顔だ。えーとあれは……

「——草壁！」

その男、草壁誠一郎は、こちらに顔を向けた。彼は彼女と同じく尋常小学校からの付き合いで同じ師範学校<sup>しはんがっこう\*</sup>に進学したが、2年の時に仏蘭西<sup>フランス</sup>に留学していた。

「草壁じゃないか、いつ戻ってきたんだ？」

「あア、皆口か。久しぶりだな。」

「何だよ。帰ったンなら連絡くらいするもんだぞ。」

「……済まん。」

俺たちは、積もる話もあって、店をすぐ出て、町を歩きつつ話をすることにした。雲一

\*1 「師範学校」…教員を養成するための学校。初等・中等学校教員の養成（師範教育）を目的とする。

つ無いすばらしい天気だ。太陽が燐燐と輝き、普通の昼間を明るく照らしている。草壁は、  
あたりを懐かしむように眺め、その瞳は寂しげで、鄉愁に溢れ、どこか遠くを見つめている  
様だった。

「留学とやらは上手くいったのか？俺には仏蘭西なんて遠過ぎて、全くピンと来ないが、  
さぞや華やかなんだろうな。お前が学ぼうとしてた芸術というやつはどうだった？」

俺たちは、橋の上で立ち止まり、橋の欄杆に手をかけて話し始めた。

「……そうだな。学ぶべきものは、たくさんあったように思うよ。——実は勉強はそ  
こそこに戻ったんだ。許嫁が危篤だという報せを受けたのでね。」

「それじゃあ此んな所に居てはいかんのじゃないか。すぐに行ってやらないと。」

「いや……良いんだ。もう行って来た。其に傍に居てやるよりも他にしてやらねばなら  
ない事を見つけたからね。」

——此の時、意味有り気な草壁の台詞の真意を尋ねておけば、あんな事にはならなかっ  
たのに………

## 2

昼間とは打って変わって、風の強く吹く此の夜に、ある墓地に一人の男が佇んでいた。  
葉の無い木々は揺れ動き、草は騒騒と騒めいている。流れるような叢雲から姿を現した美  
しい三日月だけが彼を見つめていた。

——美鈴さん もうすぐ……… もうすぐですよ もうすぐ………

## 3

### ガン！

「——起きろ皆口!!」

俺は、その馬鹿でかい声と衝撃で目を覚ました。一人の男が俺を見下ろしている。その顔  
は、もうキレている。

「——あれ？片瀬……」

「あれ？じゃないだろう！貴様、今日こそ学校に出てくると云つておきながら、今何時  
だと思ってるんだ！」

「そ、そうだった。いかん！急がんと……」

俺は今日が論文の提出日だということもあって、今日こそは学校に行くと決めていたのを  
思い出し、ガバッと飛び起きた。

「莫迦者っ、もう夕方だ!!」

### が～～ん！

俺は、鶴の飛び行く朱色の空を窓から見て、ショックを受けた。

その後、俺は片瀬の命令で団子を奢る羽目になり、近くの茶屋へ出かけた。

「いや、実は昨夜も遅くまで書いてたもんだから。」

「小説か？」

「……まあな。」

「貴様も諦めが悪いな。未だ続いているのか。」

「……放っといてくれ。云うなれば是が俺の存在理由というやつだ！」

俺は右手に持っていた麦湯を置いて力説した。

「いつも投稿の締め切りに書き上がらんような奴が豪そうに。」

「う、煩いな!! 真の文学とは時間に追われて完成させるもんじゃないんだっつ！」

俺は勢いよく立ち上がって言った。周囲の眼が俺に集中した。俺は、頬を赤らめて椅子に座った。

「物は云いようだな。」

「おによれ。」

「……おや？」

片瀬が何かに気が付いた様だ。片瀬の目の向いている方へ俺も目を向けた。

「あすこに居るのは草壁じゃないか？」

「あア本当だ。俺は何日も前にも会ったぞ。奴め、いつの間にやら帰国していたそうだ。」

「然し……」

「何だ？」

俺は草壁の顔をじっと見つめながら、少し異和感があるのを感じた。

「妙だな。どうもこの間会った時よりも随分變れて見えるが……。草壁っ!!」

俺は割と大きな声で呼んでみた。が、彼は大通りから細い路地へと入っていってしまった。

「あらら？」

「気づかなかつたようだぞ。」

「追ってみよう！」

俺は片瀬に麦湯を飲み干させ、素早く勘定を済ませ、バッと外へ出た。まだかろうじて見えていた。俺たちは、仕事帰りの人で溢れかえる町並を縫うようにして追いかけた。

「何だろう、どんどん人気の無い方へ行くぞ。」

「この先には川があるだけだからな。」

…………りん…………

「しっ……！」

「ん？」

「今、鈴のような音がしなかつたか？」

「そうか？」

俺は耳をすましてみた。特に何も聞こえてこない。

「皆口、あれを見ろ！」  
川辺に大きい手押し車が止まっていた。

…………りん……りーん…………ちりりん……り～～ん……

俺は、瞬間的に百合ちゃんの言葉を思い出した。そして、怖くなつた。

「片瀬え…………見なかつた事にしよう！」

逃げようとする俺の服を片瀬はむんずと掴んだ。

「待て！よく見ろ、草壁が買う様だぞ。」

五十過ぎと思われる男から草壁は一つの風鈴を買つてゐる。

「……あんな氣味のわるい風鈴屋から、それも今時分、風鈴なんか買ってどうするつも  
りなんだ。」

片瀬はじっと様子を眺めている。

「また何処かへ行くようだ。」

俺達は、さらに後を尾けた。もうすでに辺りは闇に包まれ、道を微かに照らすものは、冬空の月だけとなつてゐた。この道を通るってことは……墓だ！どうやら墓地へ向かつてゐるらしい。草壁は俺達の尾行に全く気付いてはいない。

草壁は、墓地に着くと、暗い中迷いもなく進み、やがて一つの墓石の前に片膝をついた。ごそごそと何かしているが、こちらからは暗くて何をしているのか、さっぱり分からぬ。

——俺達は、二人共草壁に声を掛ける事が出来なかつた。こっそり後を尾けた後ろめたさも手伝つてはいたが、何よりも草壁の横顔が泣いてゐる様に見えたので……

草壁が立ち去つた後、彼の居た墓を見てみた。

「此は……此んなにたくさん風鈴が……」

風鈴は、その墓石の足元に葬めく様にして置かれていた。其はまるで水を固めた様な美しさだ。薄明るい月光の中、墓石がゆるく光を浴びていた。

其の夜は、俺の部屋に帰つて草壁について話をした。

「草壁に許嫁が在るといふのは、俺も聞いたことがある。だが、どうやらあの墓は其の許嫁のものの様だな。草壁の帰国前か、帰つてすぐか……兎に角、最近亡くなつたのは間違ひ無いだろう。」

「けど、其んな事奴は一言も云つてなかつたぞ。」

「云……どうも奇異の観がある。」

やがて俺達の危惧は曖昧な形ではあったが、目前に現れた。

「何をだい？百合ちゃん。」

「まア矢張知らないのね。本ッ当に疎いんだから二人共。」

俺達は、例によつてあの喫茶店に來ていた。そして、百合ちゃんは、俺と片瀬の前に珈琲を置きつつ話し始めた。

「此の通りの角に花野屋さんって洋品店があるでしょ。そこの奥様が近頃亡くなられたんだけどね。なんでも生前は活動<sup>\*1</sup>を観るのが大変お好きだったそうで。その為かしないけど、よく行かれていた映画館に其の奥様の幽霊が出るのですって。」

「何だ、また噂話を聞き込んできたのかい。」

「女性は其う云うのが好きだからな。」

「あら非道い。でも今度は只の噂話じゃないのよ。だって、私も見ちゃったんですもの。」「幽霊を？」

「幽霊を見たって云うのとはちょっと違うんだけど……。此の間、私も友達と久しぶりに活動を観に行ったの。そしたらロビイに花野屋さんの御主人がいて隣に向かって何か話していたんだけど………

“君は前から此の映画が観たいと云っていたから……楽しみだったろう？連れてこれて良かった”

其の席には誰も坐っていなかったの。」

「其の奥方に話し掛けっていたのだと？」

「だって、そうとしか考えられないもの。其にあの御主人も何だか最近、様子が変だし……」

「どんな風に？」

「ホラ、栄さんに話したでしょ、風鈴売りの事。あの御主人、買っていたんですねってよ。しかも一つや二つじゃないの。毎日一つずつ。最後には持ちきれない程の数になっていたって。」

「へえ～。」

「ね、妙でしょう？御主人がこのところ非道く寝れているのと何か関係あるのかもって皆云っているわ。」

やつれて……？俺と片瀬は目を見合せた。

## 5

ゴオーゴオー……風が凄じく吹き荒れている。更にその風は、どうしようもなく冷たいのだ。

「うううっ寒いっ……んでもって恐え。お前よく平気な顔していられるなア。」

「貴様の修業が足りんからだ。」

\*1 「活動」 … 「活動写真」の略称。明治・大正期の映画の呼び方である。

俺と片瀬は、あの墓地の例の墓石が見える位置にある木の陰に隠れていた。

「修業って何だよ……。其より本当に現れるんだろうか。草壁の奴は。」

「恐らくな。まるで信じられん話だが、俺の想像が正しければ……、！、皆口！」

俺がそちらに目を向けると、改<sup>あらた</sup>った白い着物を着た草壁が真剣な目をして凄<sup>すさま</sup>じい風の中を歩いていた。手には、一つの風鈴がある。俺達は、草壁をじっと観察した。すると草壁は木と木の間の何かに風鈴を結びつけていたようだった。

…………りん…………りりん…………

よく見ると木々の間に何本もの縄が張りめぐらされ、幾<sup>いく</sup>つもの風鈴が吊<sup>つ</sup>るされていた。

「いつの間にあんなに風鈴を下げて……」

「——草壁!!」

片瀬が叫んだ。草壁は、ピクッとしてこちらを向いた。

「止めるんだ……！」

「皆口、片瀬……何故此處に……」

焦<sup>あせ</sup>りが顔に滲<sup>じ</sup>み出ている。だが、草壁は、すぐ元に向き直り作業を続けようとした。

「止めろと云<sup>い</sup>つとるのが分からんのか!!」

そういって片瀬は、草壁にこっそり近づいていった俺ごと彼を蹴<sup>け</sup>とばした！

「ギャッ！」

俺は、草壁の肩に頭を強打した。

「押さえてろ皆口!!」

俺は、頭の上に数個の惑星を携えつつ、草壁をガシッと掴んだ。

「は、放してくれ！此の風鈴で最後なんだ！今日を逃したら……」

「莫迦!!其<sup>は</sup>んな事をしたらどうなるのか判<sup>わか</sup>っているのか!!」

「うおおお～～」

凄<sup>すさま</sup>い声とともに草壁は俺を無理矢理引き剥<sup>は</sup>がして、片瀬の方へ突き飛ばした。俺は其に<sup>それ</sup>より今度は片瀬の頸<sup>あご</sup>に後頭部を強打した。頭上に太陽系が完成した。草壁は、もの凄<sup>すこ</sup>い速さで走り出し、最後の風鈴を結びつけた。

「しまった……止<sup>ま</sup>すんだ草壁!!」

…………りん…………ぼっ…………ぼっ…………

数多<sup>あまた</sup>の風鈴に次々に火が灯り、淡<sup>とも</sup>い淡<sup>あわ</sup>い光が闇に現れた。その光が煙状<sup>けむりじょう</sup>に姿を変え、虚空に集中し、集束し、何かを形づくろうとしている。

「嗚呼……」

草壁はその場に座り込んでしまっている。光は更に集まり、やがて美しい女性の姿がそこに完成した。

「美鈴さん……逢<sup>あ</sup>いたかった……」

——後になって草壁は総て話した。許嫁を喪くして、傷心のあまり後追いをしようと川へ行った時に、あの風鈴売りに会ったのだそうだ。

“命を分け与える風鈴……？”

“へえ。見れば、かなり心を痛めておられる御様子。旦那さえ惜しく無いと仰るならば……。あなた様の残りの命を半分分けて甦らせてやる事が出来るんですよ。但し、既に肉体は失くなっちまっていますから魂だけですがね”

“どうすればいいんだ？”

“なに、簡単な事で。此の風鈴を毎日一個ずつ買って墓に置くんです。四十九日が来て、風鈴も49個になった夜……。必ず其の娘さんは現れます”

「全く……俄には信じられない話だ。」

「然し、我々は目の当たりにしているからな。信じないわけには、いかんだろう。」

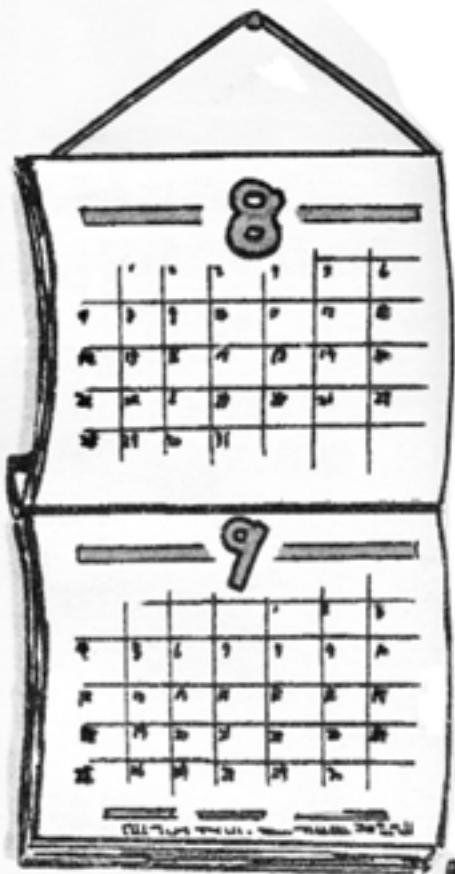
「——人と云うのは……辛い事から逃れたいと思ったらまやかしであろうと縋ってしまるものなんだな。」

「本来ならば、どんなに大切な相手でも死んでしまえばもう二度と逢う事は叶わない。せめて来世でまた出逢うのを願うだけだ。——然し、其を待つのはあまりにも長い。草壁の気持ちは、総ての人に理解できる気持ちだ。」

——その後、風の噂に草壁が死んだ事を聞いた。風邪を拗らせたそうだが、恐らくは、許嫁に命を分け与えた為に寿命が短くなってしまったのだろう。あれきり風鈴屋を見た者は誰もいない。また何処か別の街で命の音色を売っているのだろうか…………

……………りん……りりん…………

The End



### あとがき③　— 本当の後書き —

この小説「瑠璃風鈴水鳴譚」は、私の尊敬する漫画家、片山愁先生の漫画をもとに書いた作品です（要するにパクリ）。この漫画のあまりの美しさに感動したことで書くに至ったわけですが、片山先生に失礼な程、未熟な文章で、本当に申しわけなく思っております。読んで下さっている方も本当に御免なさいつつ。

さて、この漫画は、「嵐雪記」という漫画の第一巻に描かれている作品ですが、ぜひ一度は読んでみて下さい！すばらしい作品です。もし「嵐雪記」の方を読んでみて、すばらしいと感じたのなら、「あやかし歌姫かるた」こっちの方も読んでみて下さい。

そんでもって「殺陣祭」についてですが、この作品のサブタイトルの正体に気付きましたか、特に意識していなかったという方については、もう一度表紙に戻って、考えてみて下さい。3秒差し上げます。……わかりました？実はこれは、僕らが抱えている大きな問題の提示なのです。つまり、“日本誤報会の危機”は、“日本語崩壊の危機”であったというわけなんです。読んで下さった皆さんの中に、どれだけこの問題を意識している人がいるでしょうか。21世紀に入るに至って、日本語は、今までに無い程歪んできています。このままでは、やがて日本語は崩壊するでしょう。日本語は、私達の国の言葉でしょう。このままでいいわけは無いのです。私は日本語は、世界で一番美しい言語であると信じております。江戸時代、いまからたった100年前でさえあれほど美しかった日本語は、今はもう消えかかっていると言えるのではないでしょうか。何とかして日本語に光を灯そうという理由で私はこの作品に立ち向かいました。私にとってこの作品の目的は、いかに世界を打ち撃たなければなりません。この作品中の言葉の使い方は、大抵間違っているはずです。その間違った使い方をしている言葉を見て、正しい使い方はどうなのか、今一度振り返って下さい。すんなり流してしまってはいませんか？そして、これを機に自分の周囲に、どれだけ壊れた、どれだけ歪んだ言葉が蔓延っているのか確認して下さい。其により、自ら言葉の使い方に気を付けて戴けるのならば光栄です。

さらに、この作品を冊子にしようと思いついたのは私ですが、理由はと言いますと、何かを残したかったという事が挙げられます。この高校三年間という人生においてとても短い期間に、自分は何をしたのか、何を感じたのかが、少しでも残せたら……と考えたわけです。将来、誰かにこの高校生活について語る時、修学旅行であったり、体育祭であったり、その部分部分の思い出しか話すことができないのであれば、あまりに悲しすぎます。私達が友達と一緒にすごした時間は、アナログな時間帯であって、決して途切れ途切れではないからです。この作品が形となって残ることで何かを思い出せれば…と思います。思い出を語る時、伴うものが涙ではなくて、笑いであっても良いでしょう。私は、友達と笑い会った日々を決して忘れてはなりません。だからこそ其の具現化されたものが一つや二つあることが必要なだと考えます。最後に、この作品に携わって下さった皆さん、並びに筆者の方々に深い感謝を致します。ありがとうございます。

2000年1月28日　自宅にて　The gardens「約束の場所へ」を聴きながら  
カピバラキング

#### あとがき④ 実は、いきなり頼まれたんです。

今から1年以上前、まだこの「殺陣祭」が名もないただの“交換小説（？）”だった頃、僕はいきなり一冊のノートを渡されました。小説を書いてみた経験がほとんどないのに、文章の続きを書いてくれなんて頼まれたので、その時は正直言って本当に戸惑いました。その主旨を尋ねてみれば、毎回殺人事件が発生するやら、セクションの呼び名（第〇章とか言うヤツね）は全て異なるとか、一つ一つのセクションのタイトルは意表を突いたものにする……などなど。しかも、最初に任されたセクションは「殺陣祭」の世界観が完全にぶっ壊れるかどうかの境界線に当たるようなところだったので。結局は、思い付きでガンガンと書いていったために、ギャグやおふざけが入りまくった文章になってしまいました。そして、この「殺陣祭」の執筆が終わった時に、自分は小説を書くとギャグに走ってしまうという事に気付きました。本編の文章、読みにくかったらスミマセン。

話は変わって、「殺陣祭」の内容についてですが、「プロローグ」と文章の終盤の方を読み比べてみて下さい。文章の雰囲気が全く違っているでしょう。これが世界を打ち壊した成果です。筆者の一人であるこの僕も、時々「ひぐま」と「わぐま」の区別がつかなくなるなど混乱も数多く有りました。ですから、一度読んでからしばらく間をあけた後に読み直す時は、決してセクションを飛ばして読まないようにして下さい。さもないと、多分混乱します。気を付けて下さい。

そして、この作品には数多くの変わった単語が使われています。これらの変わった単語は主に学校の授業で登場した印象深かった単語なのです。（中にはゲームっぽいものなどもありますが）それを上手く利用して単語力アップ！……というのは冗談ですが、こんな言葉もあるんだなーって感覚で見といて下さい。さらにこの作品には文法事項も盛り込んで有ります。（古典文法も混じってますが…）そのあたりも再確認していただければ光栄です。

ちなみにこの作品に登場する重要な（？）単語『侍り』についてですが、僕たちが使っている『侍り』の語義は古語辞典に載っているラ変動詞やら丁寧語などの説明ではとても表しきれない程オリジナルで複雑なものです。J. J. 氏が描いた宇宙人（現・侍り星人）のイラストに誰かが『侍り』の吹き出しを付けたところ、その組合せが僕たちにとって何故か異様におかしくてそのまま定着し、それが発展して僕たちにとって『侍り』という言葉は様々な意味を成すようになったのです。（現在は主にオールマイティーな万能語として使用）もしかしたらその他にもきっかけがあったのかもしれません、完全なことは僕にも分かりません。（いい加減でスミマセン。）

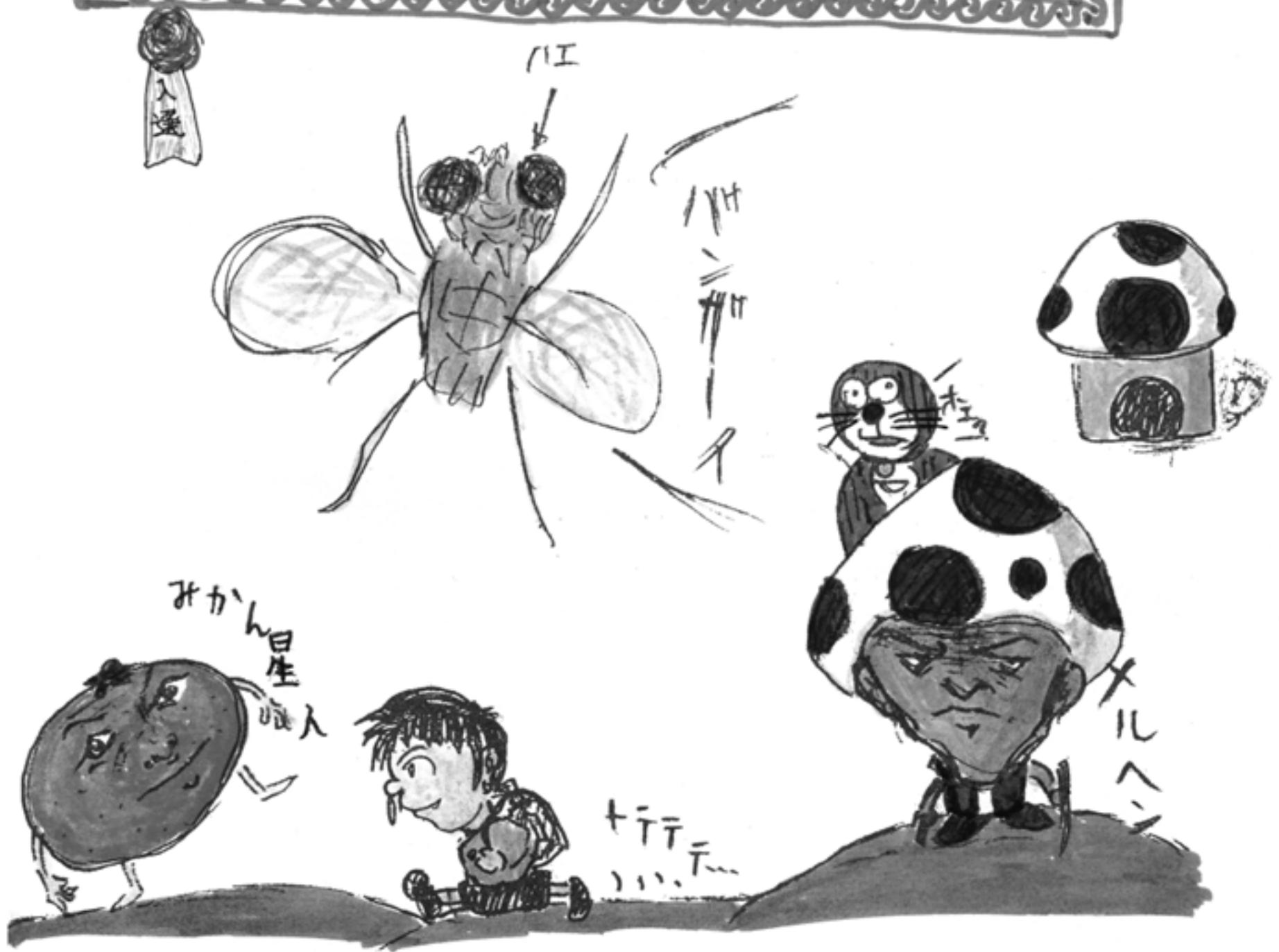
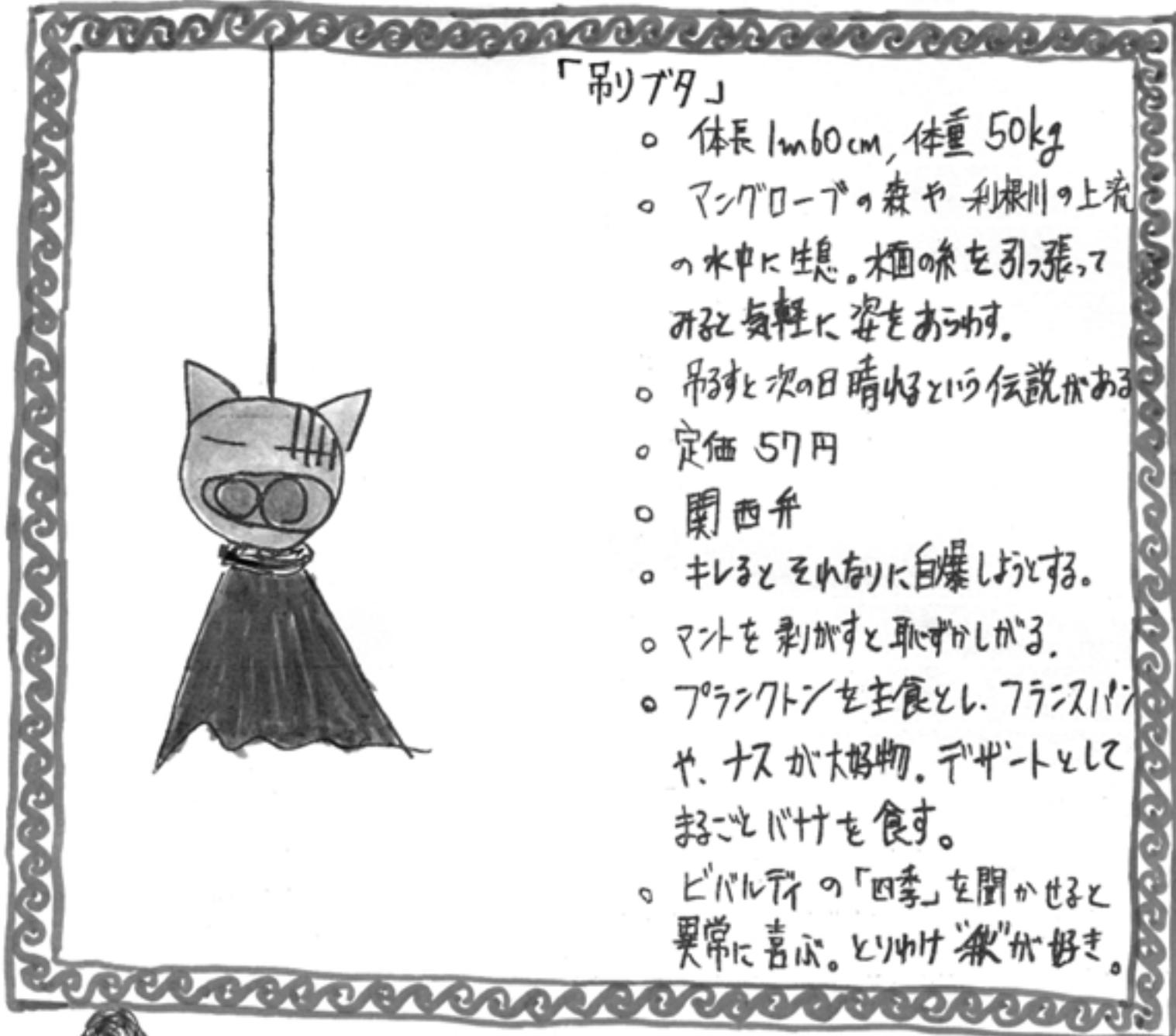
最後に、「殺陣祭」を読んで下さった皆さん、どうもありがとうございました。

Play Station

P. S. 「殺陣祭」では熊蔵氏が色々ゴイ事になっていますが、これはあくまでもフィクションのような気がします。

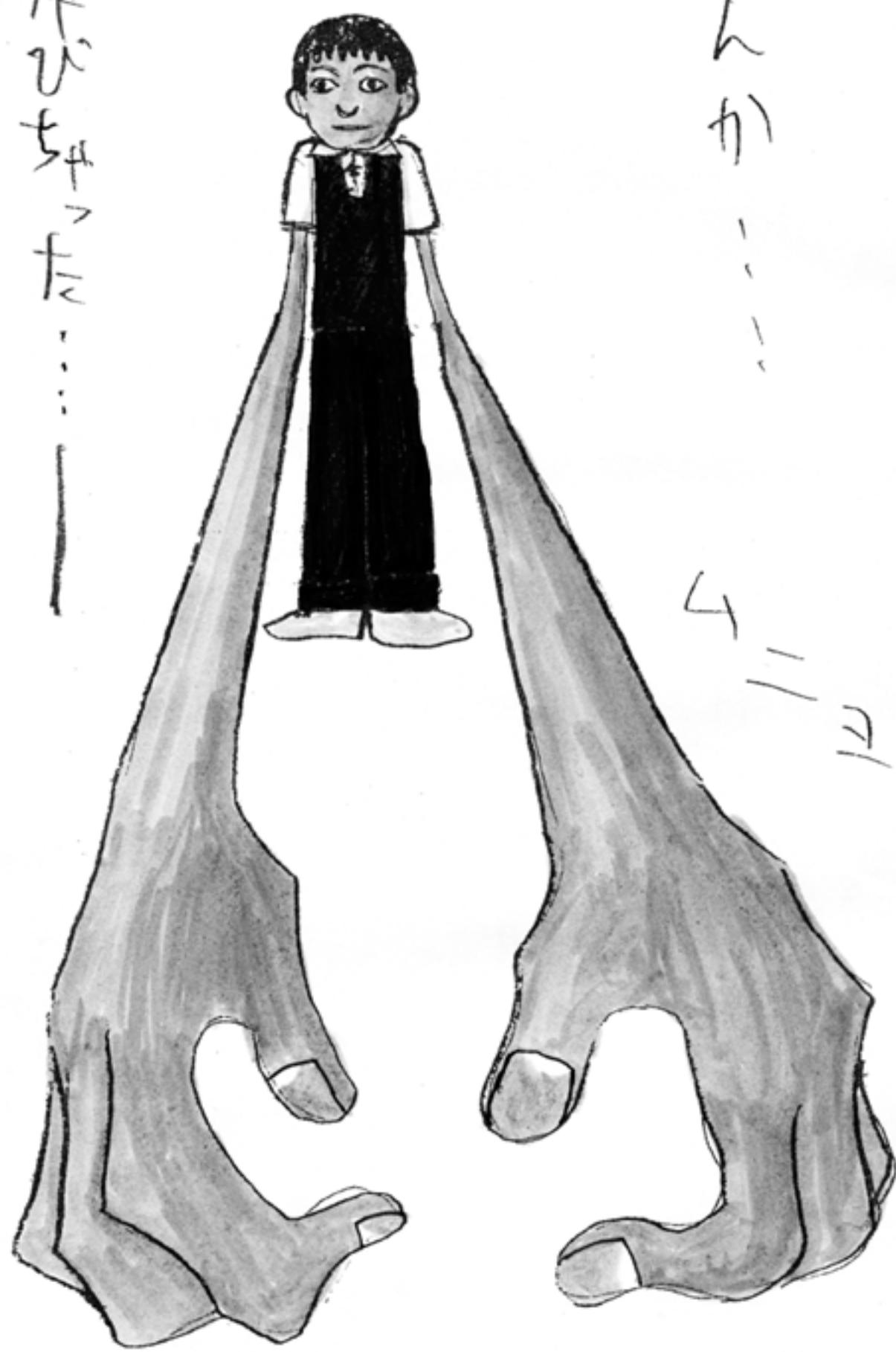
2000年2月9日 自宅にて 日本テレビ（「きょうの出来事」など）を見ながら

ヴェハーリ（仮）



な  
ん  
か  
…

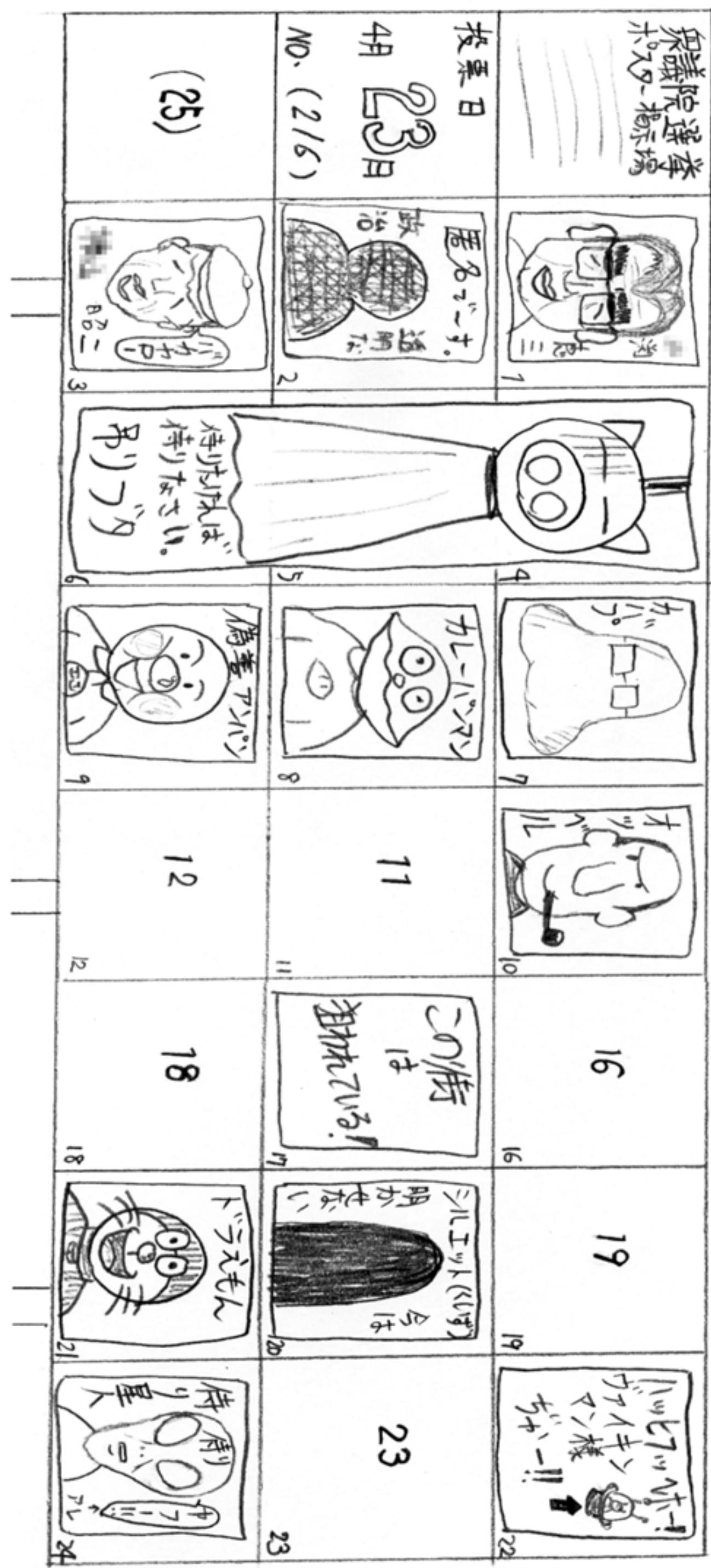
4  
—  
12



手  
が  
伸  
び  
ち  
だ  
…







どうぐ  
つかうな

リュカ	ブックル	ピエール
H 305	H 330	H 250
M 106	M 10	M 110

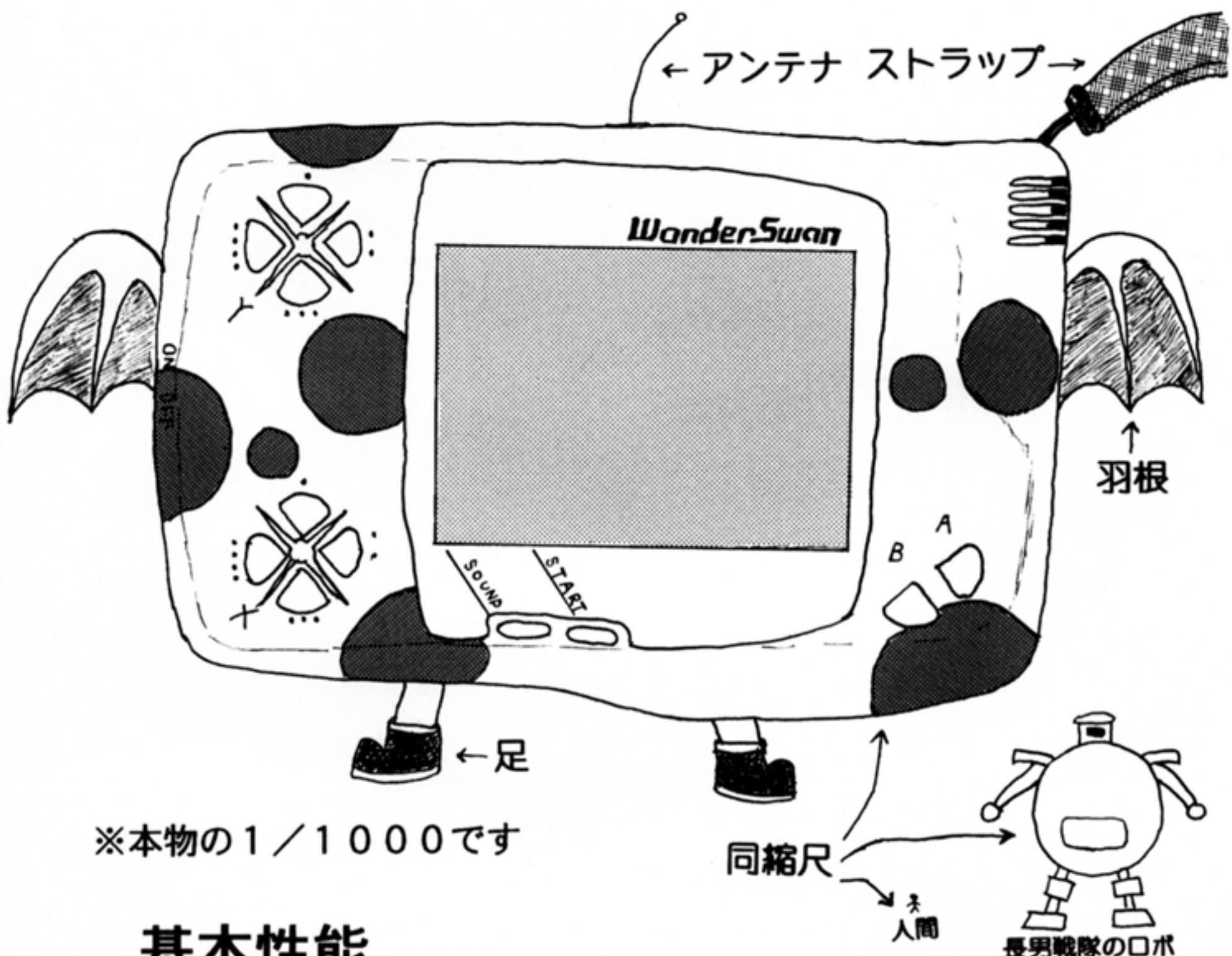
No. \_\_\_\_\_  
Date . . .



リュカ  
▶こうげき とくさい  
どうぐ そうび  
じゅもん ぼうしきよ

▶怒羅右衛門 1匹  
団子三兄弟 1匹

# 番外編 ワンダースwan ~そして新たなゲームの歴史が始まる~



## 基本性能

CPU.....65535ビット

画面.....256000ドット

電源.....単3乾電池1本で30時間位使える

その他.....ピームライフル、ヴェスパー搭載・飛べる

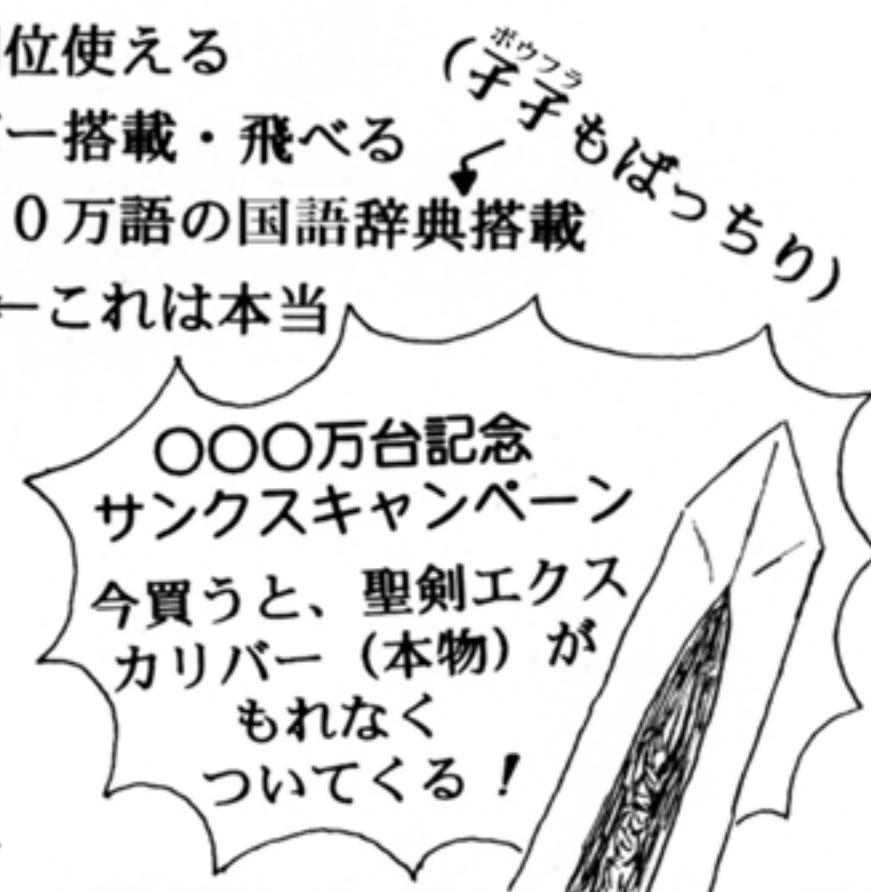
新クラウン和英辞典・120万語の国語辞典搭載

発売日.....1999年3月4日(木)←これは本当

価格.....時価(季節によって変化)

[このページは広告です]

- 53 -



## 編集後記 時の経つのは早いもので。

殺陣祭の書籍化 11 周年記念…というわけではありませんが、殺陣祭を遂に電子書籍化してしまいました。今年の春に様々なメンバーが集まった旅行で殺陣祭のことが少し話題に上り、電子書籍ならば Web では表現不可能なこともそのまま表せると考えたのが、作成のきっかけでした。

今回の電子化にあたっては、書籍として印刷されたものをスキャナーで取り込み、注釈の追記などを行っています。文中の固有名詞や、不適切な表現、矛盾点等は修正していますが、内容はほとんど書籍版と同一です。

内容のチェックのため数年ぶりに全文を読み直しましたが、あまりにもぶつ飛んだ話で、つい吹き出しちゃったこともあります。序盤で登場した人物は「Mission7」を最後にほとんど登場しなくなり、最終的には夢の世界と現実世界の熊二頭が大暴れするだけという、とんでもない展開です。当時「これが面白い！」と思ったことを、すべて勢いに任せて各人が書いたらこそ、このような話になったのでしょうか。「1 分 24 秒 345」「マッハ 0.07」など、やたらと無意味に細かい数値が出てくるのも、今となっては今ひとつな表現であると思いますが、当時はこの細かさに何ともいえない面白みを感じていたのだと思います。

作品として優れた評価をつけることは難しいですが、社会人としての月日の経過と共に考え方も少しずつ変わり、同じように作品を作ることはもう出来ません。だからこそ、この作品を通して関わった級友達と過ごした記憶は、これからも大切にしていきたいと思っています。今となって、カピバラキング氏のあとがきがとても身にしました。

最後に、今回の電子版ではおまけとして、冊子に収録されなかったページを追加しています。総ページに対する本編の割合が更に減ってしまいましたが、細かいことを気にしてはなりません（笑）。

2011 年 8 月 4 日 自宅にて 扇風機の回転音を聞きながら  
ヴェハーリ（仮）

本書は、二〇〇九年三月に発行された  
「殺陣祭～日本誤報会の危機～」を  
電子化したものです。

## 殺陣祭～日本誤報会の危機～

発行日：2011年 9月 1日 初版

著 者：侍り社と愉快な仲間達

- ・カピバラキング
- ・ククレカレーJJ
- ・ヴェハーリ(仮)
- ・Juuma
- ・傘倉 奏
- ・ロドリゲス=サダコ=メソポタミア=ABE

発行者：侍り社・出版開発部

<http://www.haverisxa-pd.com/>

© Haverisxa 2000-2011

お問い合わせの際は、お手数ですが上記サイトまでお願ひいたします。

